

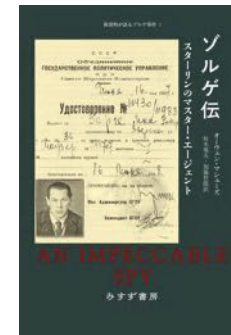
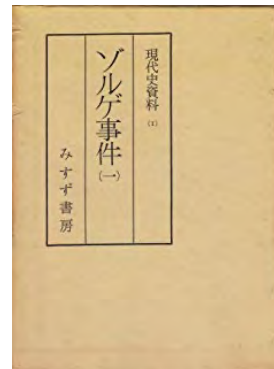
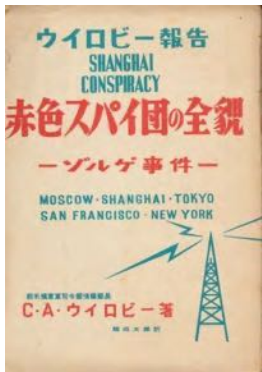
2023.5.13 明治大学平和教育登戸研究所第13回企画展

「極秘機関『ヤマ機関』と登戸研究所—日本陸軍の防諜とは ゾルゲ事件80年」 講演会「ゾルゲ事件についての最新の研究状況」

- 一 尾崎 = ゾルゲ研究会発足
- 二 いまなぜ尾崎 = ゾルゲか？
- 三 情報戦としての尾崎 = ゾルゲ研究
- 四 新段階の論点・争点



尾崎 = ゾルゲ研究会代表
加藤哲郎 (ネチズンカレッジ)
katote@jcom.home.ne.jp



パワポ概要目次

一 尾崎＝ゾルゲ研究会2022年11月発足

- 1, ファッション『ゾルゲファイル』、マッシュューズ『ゾルゲ伝』翻訳出版(みすず書房)
- 2, 新事実・新資料発見——モスクワのゾルゲへの不信感

二 いまなぜ尾崎＝ゾルゲか？

- 1, プーチンのロシアにおける「愛国者」ゾルゲ・ブーム
- 2, 資料公開——米日官憲資料とロシア交信資料650件
- 3, 実証的研究の進展——英語圏の3段階、ディーキン＝ストーリー、ワイマントからマッシュューズへ
- 4, 分裂した東西ドイツのゾルゲ像、中国で始まった「上海のゾルゲ」
- 5, ゾルゲ事件研究の現段階——国際情報戦研究と結合
- 6, 日露歴史研究センターの功績と解散

三 情報戦としての尾崎＝ゾルゲ研究

- 1 1942年5月17日司法省発表(情報統制)
- 2 戦後日本のゾルゲ事件イメージの出発——尾崎秀実『愛情は降る星の如く』からGHQウイロビー報告へ
- 3 1950年代——冷戦下の大衆文化としての「赤色スパイゾルゲ」、「革命を売る男伊藤律」

4 1962年『現代史資料』刊行と64年ソ連でのゾルゲ「名誉回復」——大衆文化から歴史研究へ、岸恵子とガガーリンの役割

5 1970-80年代——独ソ戦情報と日本南進情報の二大争点化、伊藤律生還と端緒説への疑問

6 日露歴史センターによる功績としての国際ネットワーク構築と伊藤律端緒説訂正・名誉回復

四 新段階の論点・争点

- 1 ゾルゲの1941年独ソ戦・南進情報打電の意義——ファッション、アレクセーエフとマッシュューズ『ゾルゲ伝』の微妙な違い
- 2 尾崎＝ゾルゲの全体像の再構築——初期ゾルゲを踏まえた知識人の戦争、周辺メンバーを含むインテリジェンス研究
- 3 戦前日本インテリジェンス・コミュニティの多頭制と対ソ諜報——憲兵隊、特高警察、思想検察の競争、ソ連も赤軍・KGB・外務省
- 4 特高警察中心『現代史資料』全4巻と思想検察の太田耐造文書『ゾルゲ事件史料集成』全10巻
- 5 21世紀のゾルゲ事件研究のために——残された多くの問題
 - ① 情報戦——1枚の資料と証言で変わるイメージと評価
 - ② 米国共産党から上海に派遣された鬼頭銀一
 - ③ 尾崎の上海後継者、昭和研究会事務局の堀江邑一
 - ④ 米国から宮城を送り出した米国共産党矢野務＝豊田令助＝佐渡出身の将月令助
 - ⑤ 尾崎秀実の検挙日は通説1941年10月15日か渡部説10月14日か
 - ⑥ ゾルゲの未完成中国論と中国の尾崎＝ゾルゲ研究の可能性
 - ⑦ 「モスクワ中央部」＝コミンテルンと各国共産党の真実、小林陽之助の全面供述



かとう・てつろう 1947年盛岡市生まれ。東大法学部卒。出版社勤務を経て一橋大社会学部教授、同大学院教授。2010年から同大名譽教授。専門は政治学、現代史。著書に「ゾルゲ事件」「パンデミックの政治学」など多数。インターネット上で「ネチズン・カレッジ」(<http://netizen.html.xdomain.jp/home.html>)を主宰中。

第二次世界大戦時にリヒャルト・ゾルゲや尾崎秀実らのスパイ組織が日本の機密情報をソ連に流した「ゾルゲ事件」が1942年5月に発表（実際の摘発は41年10月）されてから80年。今も謎に包まれた部分が多い事件の実像に迫ろうと、専門家らが「尾崎IIゾルゲ研究会」を年内に発足させることになった。研究会の代表となる加藤哲郎・一橋大名譽教授(76)にその狙いや意義について聞いた。

— 新たな研究会をつくる経緯を教えてください。

ゾルゲ事件については97年に「日露歴史研究センター」が研究に取り組み、会報の通算50号刊行や国際シンポジウムを世界各地で10回以上開催するなど成果をあげてきましたが、会員の高齢化で2018年に解散しました。事件に関する新たな資料が国内外で近年見つかったこともあり、センターのこれまでの活動を受け継ぎ、さらに国際的なネットワークをつくって尾崎、ゾルゲの研究を発展させようというものです。昨年11月に東京で研究会の設立準備会を開き、今年11月に正式発足する運びです。

— 最近のゾルゲ事件研究で注目されることは。

まず、当時思想犯の取り締まりを担当していた検事、太田耐造が残した文書の公表（17年に関係者が国立国会図書館に寄贈）が挙げられます。ゾルゲらは南進優先の国策を決めた41年7月の御前会議の内容などを入手しました。重大な情報漏洩事件にあたるのは確かですが、太田文書によると、司法省・検察当局はむしろゾルゲが近衛文麿内閣のブレインだった尾崎や西園寺公一、犬養健らを利用して日本のソ連攻撃を防ぐため南進論に誘導させようとした、つまり国策を動かす謀略だったことを問題視し、昭和天皇にも上奏していました。従来の研究は特高警察の調査記録を基にいましたが、司法検察側の太田文書から事件の異なる捉え方が見えてきました。

— 外国でも研究が進んでいる

等身大のゾルゲ 解明へ

— りょうです。

特高警察はゾルゲがソ連に送った電報を400件程度とみなし、うち約200件が確認されています。これに対し、元駐日ロシア大使館員のアンドレイ・フェシユン氏が19年にロシアで刊行した資料集によると、ゾルゲの電報と手紙は来日前の上海時代を含め約650件で日本側の想定を大きく上回る事が分かりました。電報はソ連中核どのレベルまで伝わったのかや内容の情報評価が分かる貴重な資料になっています。ロシアでは最近ゾルゲの研究書が多く出され、テレビドラマ化されるなどブームになっています。ただロシアのゾルゲ研究は、大祖国戦争（ロシアでの第二次大戦の呼称）の勝利に貢献した愛国主義的な軍事情報活動としての評価が根強くあります。

このほかドイツでは、ドイツ紙特派員として来日したゾルゲがドイツで発表した論文や新聞記事231本のリストが新たに作成されました。中国でもゾルゲが上海時代に周恩来と接触していた史実が明らかになっています。

— ゾルゲ事件をめぐる情報戦を指摘されていますね。

ゾルゲ事件を「赤色スパイ



モスクワ市内にあるゾルゲの像。1985年に建立された。近くに「ゾルゲ通り」とゾルゲ博物館があり、2016年には鉄道ゾルゲ駅ができた。

インテリジェンスや情報戦に現代的意義

— 今後のゾルゲ研究に求められるものは。

「20世紀のスパイマスター」というゾルゲ像は政治的に作られたものです。例えば大きな成果とされる独ソ開戦に関する情報は、ドイツにいたスパイなどからもソ連にもたらされていました。

事件の基本資料がそろってきたのをふまえ、戦後につくられたゾルゲ像や俗説をリセットし、等身大のゾルゲを解明していく必要があります。そのためにはジャーナリスト、知識人としてのゾルゲを見るのが欠かせません。尾崎についても同様です。ゾルゲ事件研究はインテリジェンスや情報戦という現代的意義があり、できるだけ若い世代の人たちが研究会に加わってほしいと考えています。

【聞き手・田中洋之/写真も】

記者のひとこと

東京・多磨霊園にあるゾルゲの墓が揺れている。ロシアのラブロフ外相が1月26日、遺骨をクリル諸島南部、つまり北方領土に埋葬し直す構想があると表明したのだ。1944年に処刑されたゾルゲの墓は内縁の妻だった石井花子さんが設けた。年月を経て、その相続人は維持管理が難しくなったとして墓所の使用权を在日ロシア大使館に承継することで最近合意していた。その矢先の改葬案は、英雄の遺骨を帰還させ手厚く顕彰したいということなのだろうか。ロシア側の真意は不明だが、北方領土を持ち出すところに情報戦の一端がうかがえる。

尾崎＝ゾルゲ研究会 通信 創刊準備号 2022年3月11日(金)

尾崎＝ゾルゲ研究会「通信」 創刊準備号01

尾崎＝ゾルゲ研究会設立準備会 第一回研究会開催される!

去る2021年11月6日(土)16時30分から小金井市市民会館(愛称:萌え木ホール)B会議室にて開催されました。尾崎＝ゾルゲ多摩霊園墓参会後でもあって、少し遅れて始まりましたが、二十数名の参加者をえて、19時にせまる閉場時間ぎりぎりまで、熱心な議論を交わす会合となりました。冒頭、加藤哲郎本準備会会長から「尾崎＝ゾルゲ研究会」設立準備会開会挨拶及び経過説明があり、引き続き、鈴木規夫本準備会事務局長司会のもと、2018年閉じられた日露歴史資料センターの川田博史元事務局長より「日露歴史研究センター(1998～2018)20年のあゆみ」が語られ、さらに続くセッションで、「尾崎＝ゾルゲ研究」のこれからとして、加藤哲郎、清水亮太郎、進藤翔太郎の各氏からそれぞれ報告がなされました。

*当日の報告資料PDFは、本通信にPDF添えてありますのでご覧下さい。

尾崎＝ゾルゲ研究会設立準備会 第二回研究会開催予定

2022年4月8日(金)14時～16時30分
愛知大学東京霞が関オフィス(霞が関コモンゲート西館37階)+ZOOMにて開催。

研究報告「東京朝日新聞の中国専門記者、太田宇之助と尾崎秀実の中国認識と関係性」島田大輔(JSPS特別研究員PD)

聴き取り「尾崎＝ゾルゲ研究」
「社会運動資料センターとこれまでの尾崎＝ゾルゲ事件研究あれこれ」
語り手:渡部富哉(同センター代表)



さて、この方はどなたでしょう?

奮ってご参加下さい。

なお、愛知大学東京霞が関オフィスではスペースの関係で対面参加の人数に制約ありますが、ZOOMによるリモートでも同時に開催致します。

お申し込みは、末尾の本準備会事務局までメールなどにてお願いします。

尾崎＝ゾルゲ研究資料蒐集、聴き取り調査の実施について

この間、世界各地にある尾崎＝ゾルゲ研究資料やデータを蒐集する作業にも、ほとんど予算もない状況にも関わらず、さまざまな研究機関とも協力して、徐々に取り組んでおりますが、みなさんからの種々の情報もお待ちしております。是非ともご協力のほどお願い申し上げます。

尾崎＝ゾルゲ研究会設立へ向けてこれまでもお知らせして参りましたように、2023年11月6日(予定)の設立研究シンポジウムに向けてさまざまな準備をしておりますが、その間2022年夏頃にも第三回準備会研究会を、海外研究者とも結ぶZOOM研究会のかたちで計画しております。また、設立後の活動にも繋がるよう、研究会としてのブログを立ち上げる準備など行っております。みなさんには今後とも逐次お知らせして参りますため、メンバーリスト(準備を齊えて他のSNSなどのグループへも以降も検討しております)を、まず今回お知らせ差し上げているみなさんで立ち上げたいと存じます。もし、連絡不要の方は、事務局へご一報頂けますと幸いです。

尾崎＝ゾルゲ研究会設立準備会事務局: 愛知大学名古屋校舎鈴木規夫研究室気付 norioszk@vega.aichi-u.ac.jp

尾崎＝ゾルゲ研究会 通信 創刊準備号02 2022年10月10日(月)

尾崎＝ゾルゲ研究会「通信」 創刊準備号02

尾崎＝ゾルゲ研究会設立準備会 第二回研究会開催される!

去る2022年4月8日(金)14時から霞ヶ関コモンゲートにある愛知大学東京霞ヶ関オフィスにて、尾崎＝ゾルゲ研究会第二回研究会が開催されました。冒頭、加藤哲郎本準備会会長挨拶の後、鈴木規夫本準備会事務局長の司会のもと、まず、島田大輔(JSPS特別研究員PD)さんによる「東京朝日新聞の中国専門記者、太田宇之助と尾崎秀実の中国認識と関係性」と題する報告がありました。ついで、清水亮太郎、進藤翔太郎両本準備会事務局員を聞き手に、「偽りの烙印」をはじめ、これまで尾崎＝ゾルゲ研究に多大の貢献頂いている渡部富哉(社会運動資料センター代表)さんへこれまでの尾崎＝ゾルゲ研究のあれこれを、貴重な証言とともに伺うことができました。

なお、島田報告のPTTはこの通信お送りするメールにサイズを大分落とした形で添付致しております。研究会の様子は、後日編集後動画ファイル公開の予定です。

尾崎＝ゾルゲ研究会 発足記念研究会 開催予定!

2022年11月7日(月)14時～16時30分
於:愛知大学東京霞が関オフィス(霞が関コモンゲート西館37階)+ZOOMにて開催

いよいよ来る11月7日(78年前の1944年のこの日、尾崎秀実、リヒャルト・ゾ



ルゲの死刑が執行されました)、尾崎＝ゾルゲ研究会が発足します。

それを記念して開催される今回の研究会のテーマは、みずず書房からこの10月に上梓された、『ゾルゲ・ファイル』をめぐる編者のアンドレイ・フェジュン(モスクワ国立大学東洋学部)さんと、電文ロシア語の日本語への翻訳をなされた名越健郎(拓殖大学)さんとの、モスクワと霞ヶ関とをリモートで繋いで行われる対談です。OS研からも加藤哲郎、鈴木規夫、進藤翔太郎が聞き役となり、この『ゾルゲ・ファイル』の現代的意義を議論することになっています。

なお、前回同様、愛知大学東京霞が関オフィスではスペースの関係で対面参加の人数に制約ありますが、ZOOMによるリモートでも同時に開催(いわゆ



るハイブリッドにて)致します。

お申し込みは、以下のフォームよりお願い致します。あるいは、本準備会事務局までメールなどにてお知らせ下さい。
[HTTPS://DOCS.GOOGLE.COM/FORMS/D/E/1FAIPQLSFGZPMGAETJHZEJTGI4127V5K0UMISBAEAROALGFRGSCUU4W/VIEWFORM?USP=PP_URL](https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIPQLSFGZPMGAETJHZEJTGI4127V5K0UMISBAEAROALGFRGSCUU4W/VIEWFORM?USP=PP_URL)

尾崎＝ゾルゲ研究資料蒐集、聴き取り調査の実施について引き続き、是非ともご協力のほどお願い申し上げます。ご用の向きは、以下の事務局へご一報頂ければと存じます。

尾崎＝ゾルゲ研究会設立準備会事務局: 愛知大学名古屋校舎鈴木規夫研究室気付 norioszk@vega.aichi-u.ac.jp

二〇二二年一月七日正式発足
事務局 愛知大学(旧東亜同文書院)

出版 映像 文化

「新資料が語るゾルゲ事件」

シリーズ

[全4巻 尾崎=ゾルゲ研究会編]

第二次世界大戦勃発を前に、日本のみならず世界情勢を舞台に進行していたゾルゲ事件。新資料の公開によって明らかになった情報戦の真実はいま、21世紀の戦略論・インテリジェンス論からも注目される。新資料を多数収録した『ゾルゲ・ファイル1941-1945』、最新研究をもとに描く画期的伝記『ゾルゲ スターリンのスパイ』など、4冊をここに刊行！

みすず書房

刊行にあたって

ロシアのプーチンは、ウクライナ戦争を始めるにあたって、大祖国戦争の英雄リヒアルト・ゾルゲから愛国主義と諜報技術を学んだという。しかし、ゾルゲや尾崎秀実の自立した思想と世界観・国家観は、ゾルゲ事件の真相と同じく自明ではなく、今日でも情報戦の論争点である。

一九四九年の米国陸軍省ウイロビー報告、六四年ソ連での愛国英雄ゾルゲの名誉回復のベースにされたのは、みすず書房の『現代史資料 ゾルゲ事件』全4巻に収録された当時の特高警察への被告・関係者の供述や押収資料・裁判記録だった。

二十一世紀に入ると、ソ連崩壊後に世界で公開された新資料によって、ゾルゲ事件の歴史と意味も問い直されている。とりわけロシアにおけるミハイル・アレクセーエフの三巻本とアンドレイ・フェシユンによる東京とモスクワの交信記録六五〇点の紹介と解説は、これまでの研究条件を一新した。英語圏では、それらを使ったオーウェン・マシューズの本がベストセラーになった。ゾルゲ諜報団以外のソ連による対日諜報や、ゾルゲのドイツ共産党時代のフランクフルト学派や福本和夫との関係、ゾルゲが新聞特派員として送信したドイツ語新聞記事の全貌、『ヴェノナ』など米英諜報機関によるソ連諜報網の解析、米国共産党日本人部資料、上海時代の周恩来とゾルゲの会見や尾崎秀実と東亜同文書院学生たちの関係資料、日本でのゾルゲ事件発覚端緒の解明や昭和天皇への上奏文を含む思想検察「太田耐造文書」公開などを、新段階のゾルゲ事件研究が再出発しようとしている。

(加藤哲郎 尾崎「ゾルゲ研究会代表」)

各巻の内容

1 ゾルゲ・ファイル 1941-1945——赤軍情報

本部機密文書

A・フェシユン編 名越健郎・名越陽子訳

独ソ戦、日米開戦を目前にした一九四一年、東京のゾルゲとモスクワの赤軍情報本部が交信した電報等二〇一点、ゾルゲ逮捕後の駐日ソ連大使館内の事後報告を含む一九四一—四五年の文書一七点を初公開。ゾルゲから受信した各電報文には、局長や部長による手書きの「決裁」が記され、ゾルゲの情報や彼への評価、情報局内部の伝達経路、指示系統、官僚機構によるスパイ管理など、情報将校たちの動きが生々しく伝わる。

〔四六判・四〇八頁・本体価格六四〇〇円〕

「内容抜粋」独ソ戦開始予想を知らせるゾルゲの電報

一九四二年六月一日(文書106)

シヨルと話して私は、ドイツ側がソ連侵攻に際して、ソ連の犯した戦術上の重大な作戦ミスに注目していることに気づいた。ドイツの見方では、ソ連の防衛線は基本的にドイツの前線と直接対峙しているだけで、大きな分岐線を全く持たない点に最大の欠陥があるということだ。これなら最初の大会戦で赤軍を壊滅できる。シヨルは、ドイツ軍が左翼から猛攻を加えれば、ソ連軍に最も強烈な一撃を加えることができる」と語った。

2 ゾルゲ スターリンのスパイ

オーウェン・マシューズ 鈴木規夫・加藤哲郎訳

スパイ小説の母国・英国発のベストセラー、最新研究をもとに描きだした画期的なゾルゲ伝。独ソ戦前後のヨーロッパ情勢や日本国内の動きをクライマックスに、世界史を動かした20世紀最大のスパイ、ゾルゲの生涯と活動、時代とその人物像に迫る。(23年2月予定)

3 尾崎秀実のインテリジェンス

鈴木規夫

ゾルゲの右腕だった元朝日新聞記者で中国問題専門家、近衛内閣参与の尾崎秀実。尾崎は中国と日本をどう分析し、展望を開こうとしたのか。この「まったく独自のコミュニスト」を、一帯一路やネオユーラシア主義の勃興する21世紀的視座から再考。(23年5月予定)

4 上海のゾルゲ

M・アレクセーエフ 吉田臣吾訳

ゾルゲの東京滞在に先立つ一九三〇—三三年の上海時代の全貌を、ロシアに保存されているゾルゲの手紙、通信文、エージェンツらの報告、決済書類等をもとに初めて明かした画期的著作。情報戦が繰り広げられる東洋の魔都で活動したゾルゲを描く。(23年9月予定)

新聞報道 新事実

伝説のスパイ ゾルゲの謎に迫る



第二次世界大戦の情勢を描くが、その経緯を東京からモスクワに知らせ、20世紀最大のスパイの真実を浮き彫りにしたゾルゲをめぐって近年、新たな動きが相次いでいる。刑死から78年過ぎた現在も、残された謎を解くべく、新たな研究会が立ち上がり、内外の書物などの発刊が相次いでいる。

昨年11月7日、研究者ら有志が「尾崎ソルゲ研究会」を設立し、第一回研究会が、東京都千代田区で開かれた。この日は、旧ソ連のスパイだったゾルゲと、連力を遊覧大連内閣のレーンだった尾崎秀実が処刑された78年の命日。若くは「これからの命日を引継ぎ、歴史を正す」という年がめぐり準備を進めてきた。

会場で「ソルゲ」の研究者が参加した。尾崎、代表を務める尾崎秀実、尾崎秀実の孫尾崎隆一郎らが、新研究会の設立を宣言した。

刑死78年 研究会発足や書籍出版

「これまで、ゾルゲ事件の研究の中心になってきたのは、在野の研究者であった。尾崎の死から78年経った今、尾崎の歴史研究センターが立ち上がり、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。」

尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

事件の真相を明らかに スパイ「ゾルゲ」がロシアで脚光

尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。



尾崎隆一郎の銅像。尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

ゾルゲ事件

戦時、ドイツの新聞記者として東京に駐在していたリヒャルト・ゾルゲは、旧ソ連のスパイだった。近頃、尾崎の歴史研究センターが立ち上がり、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

総辞職の裏で？

尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

近頃内閣の経緯

尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

ロシア神格化も

尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

「いまも役立っている」

尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

政府中枢から精緻な情報を収集

尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

尾崎=ゾルゲ研究会編

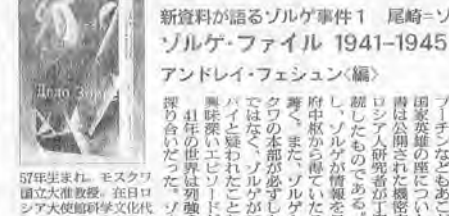
尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

尾崎隆一郎の銅像

尾崎隆一郎の銅像。尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

尾崎隆一郎の経歴

尾崎隆一郎の経歴。尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。



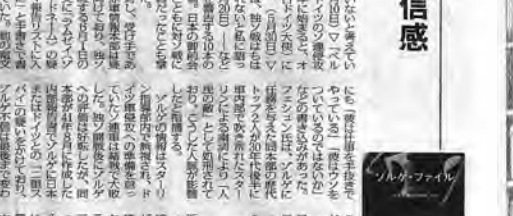
尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

ゾルゲにソ連側が不信任

尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

リヒャルト・ゾルゲ

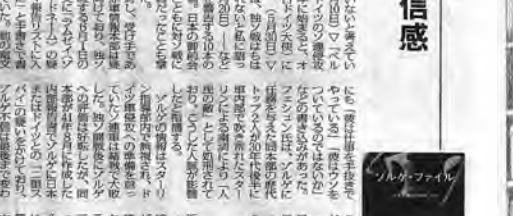
リヒャルト・ゾルゲの経歴。尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。



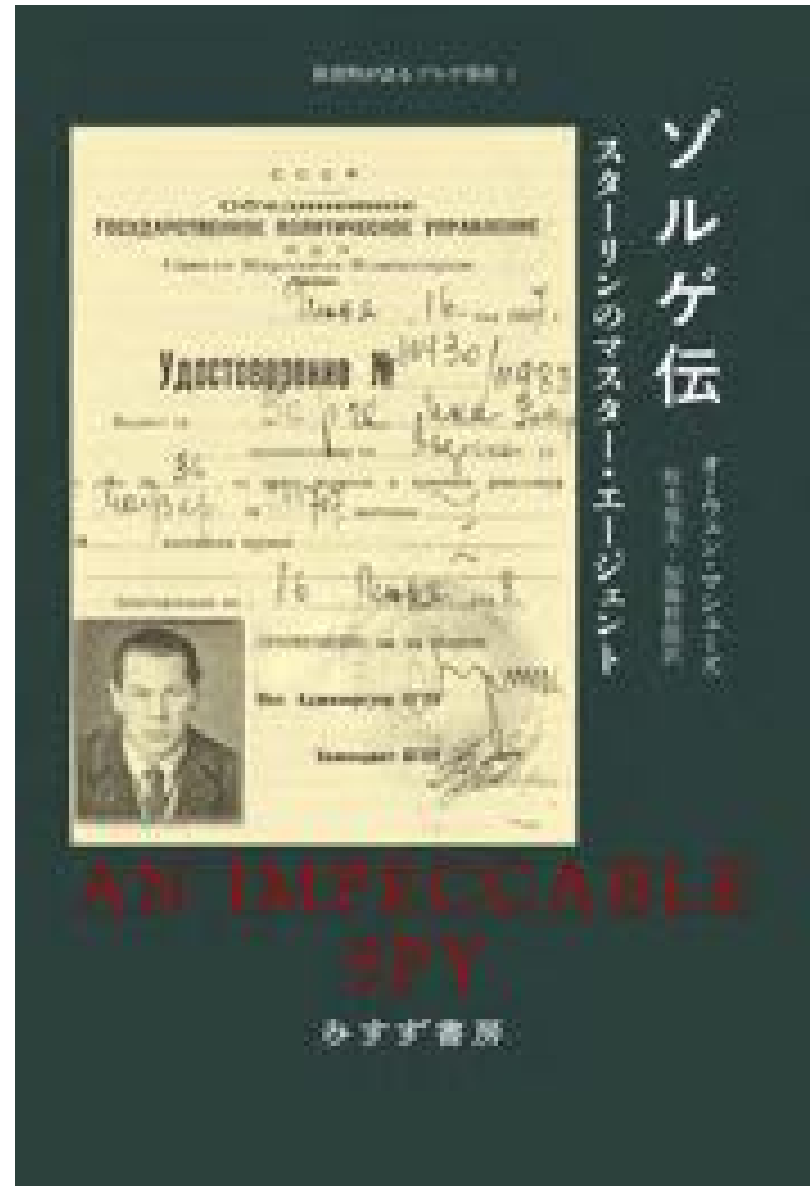
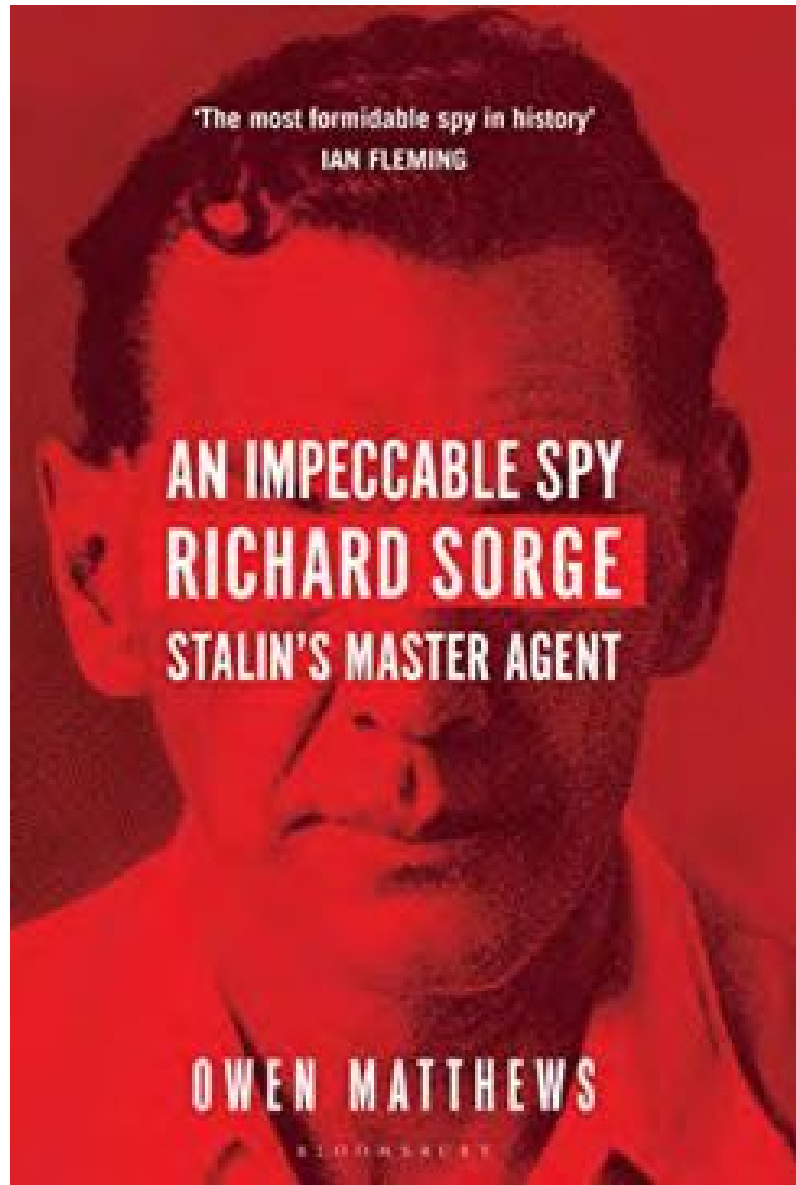
尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。

尾崎隆一郎の経歴

尾崎隆一郎の経歴。尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。



尾崎隆一郎が編集した「ゾルゲファイル 1941-1945」の書籍紹介。尾崎隆一郎は、尾崎秀実の孫として、尾崎の歴史研究の中心になって活動を開始している。



ロシアにおける「愛国者」ゾルゲ・ブーム

●ロシアTV大河ドラマ

(2018-19、石井花子原作)



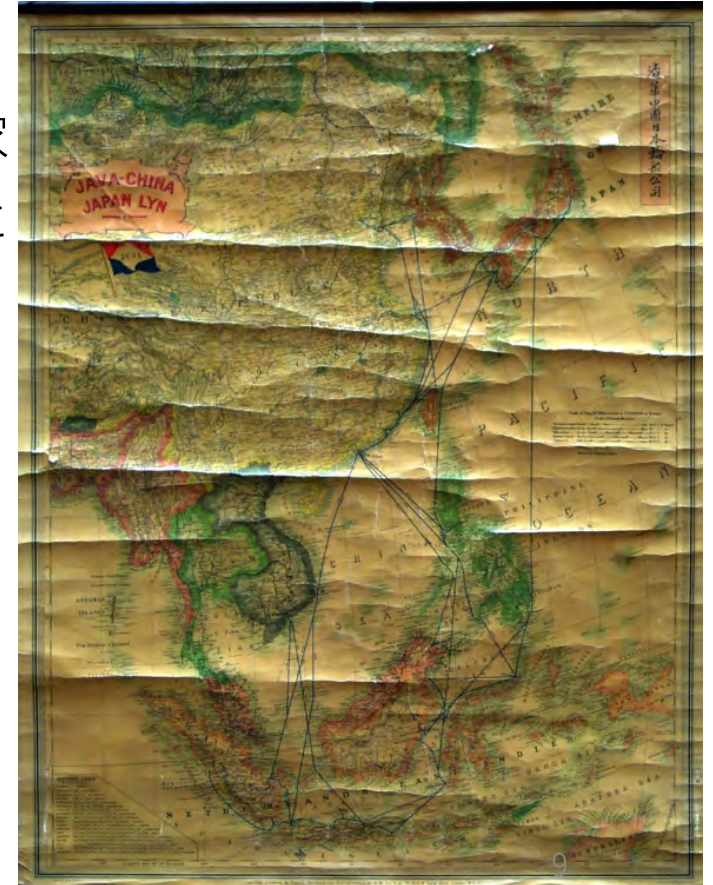
●多磨霊園ゾルゲの墓

(石井花子から駐日ロシア大使館管理へ、19年10月記念式典)



●ゾルゲの遺品「アジア地図」は日本からFSB（諜報庁）経由、GRU（国防省）へ

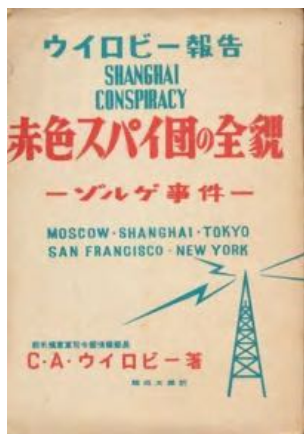
1941.10ゾルゲ逮捕時部屋に遺品として取調官吉河光貞に。戦後吉河家遺族から志賀義雄家遺族・日露歴史研究センターに2008年頃加藤哲郎鑑定・返却渡部富哉からファッションへ2020 FSBからGRUへ贈呈式



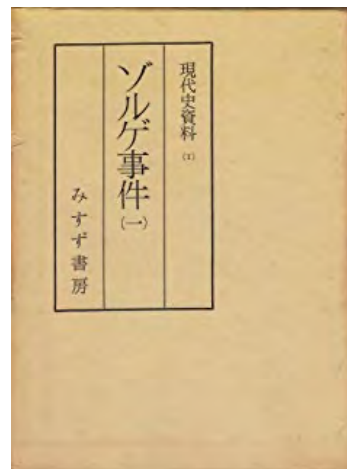
2 資料公開——米日官憲資料とロシア交信資料



1946



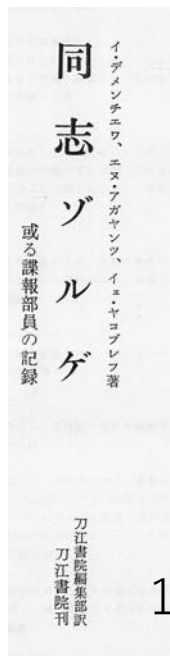
1949



1962特高推定100項目400件↓



思想検察司法資料



1964名誉回復 ソ連崩壊電文90通新公開⇒



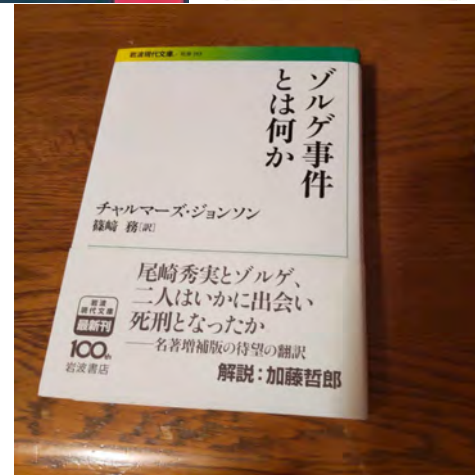
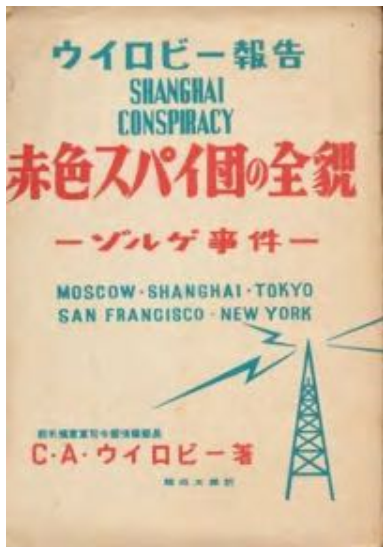
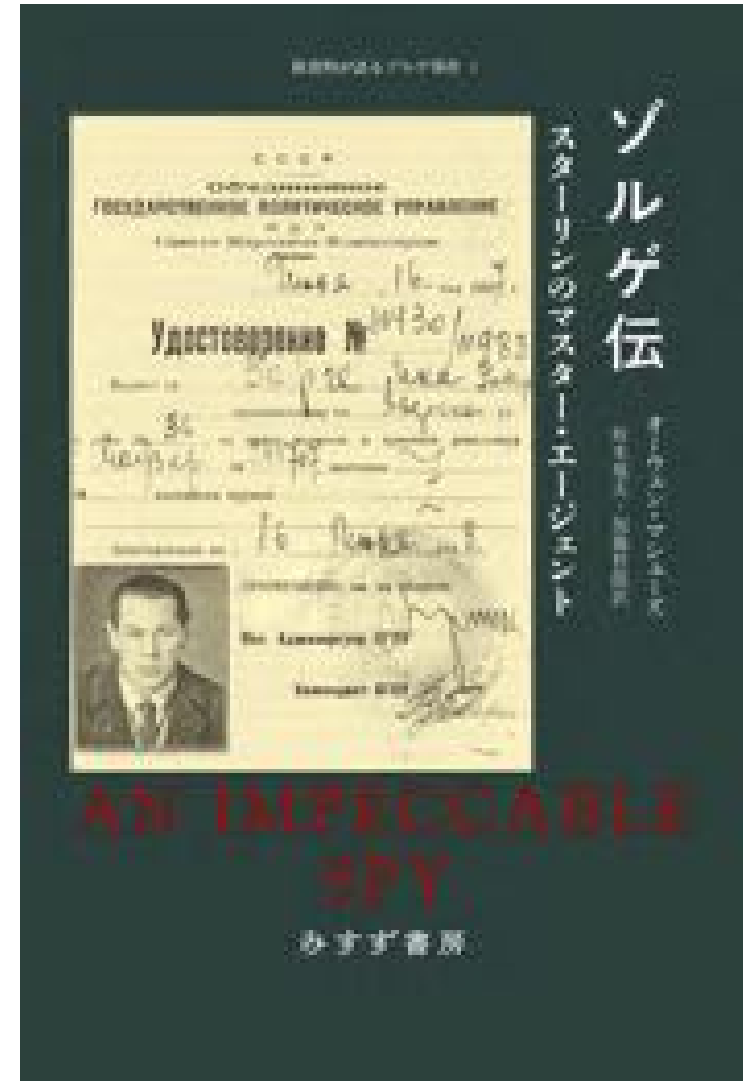
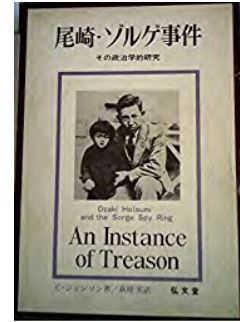
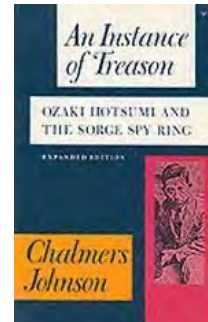
2000フェッシュン191文書⇒アレクセーエフ⇒



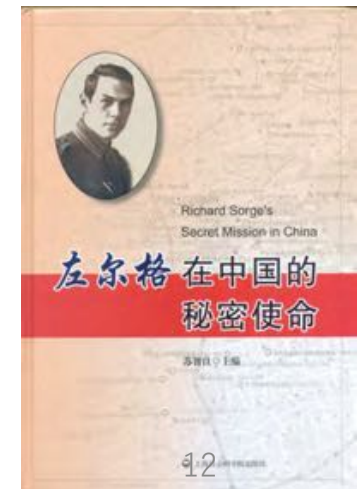
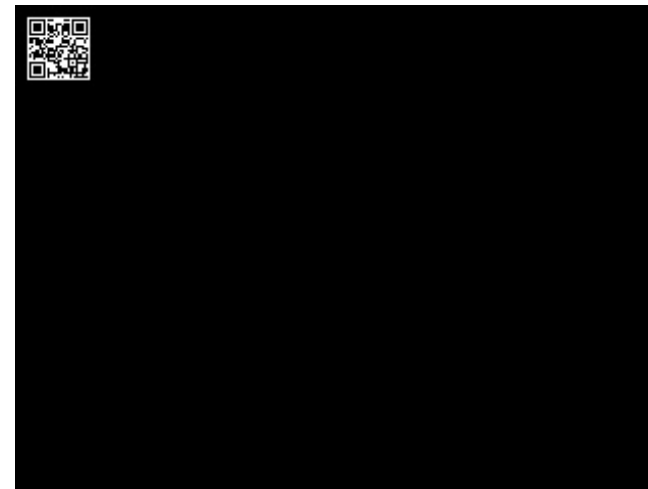
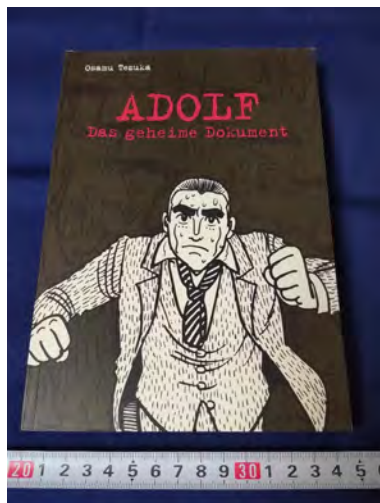
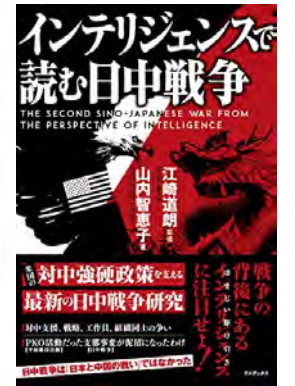
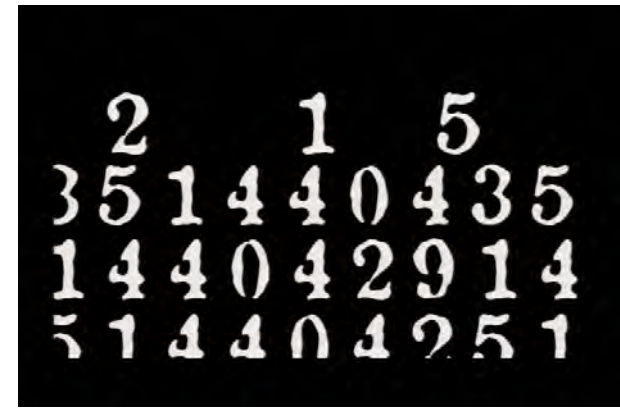
1930-45年 650点
1941-45年 201点

3 実証的研究の進展：英語圏の三段階

1966ディーキン＝ストーリー⇒1996ワイマント⇒2020マッシュューズ



4 分裂した東西ドイツのゾルゲ像、中国では
 21世紀に入って「上海のゾルゲ」、映像の役割
 —— Spiegel17回連載 1951.6.19-10.3は有益だったが

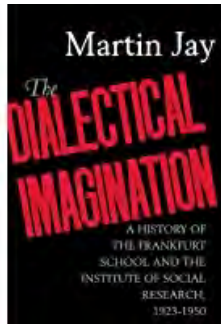


ゾルゲ、福本和夫、コルシュ、ルカーチの出会い (マルクス主義研究週間、1923、ゾルゲが書記)

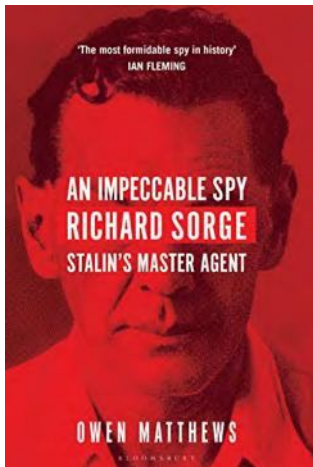
フランクフルト学派の原型Martin Jay 『弁証法的想像力』1973初版 (1922イルメナウ) →1996第二版 (1923ゲラベルグ) ←八木紀一郎『20世紀知的急進主義の軌跡』=ルカーチ、コルシュらを組織したドイツ共産党の初期ゾルゲ



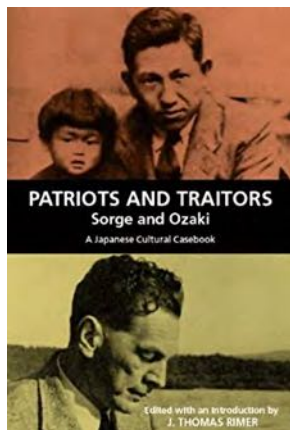
Fukumoto Kazuo drückte auf den Auslöser: Seminarteilnehmer stehend (von links): Hede Gumperz, Friedrich Pollock, Eduard Ludwig Alexander, Kostja Zetkin, Georg Lukács, Julian Gumperz, Richard Sorge, Karl Alexander (Sohn), Felix Weil, unbekannt; vorne sitzend (von links): Karl August und Rose Wittfogel, unbekannt, Christiane Sorge, Karl Korsch, Hedda Korsch, Käte Weil, Margarete Lissauer, Béla Fogarasi, Gertrud Alexander



5 ゴルゲ事件研究の現段階 = 国際情報戦研究との結合



インテリジェンス研究



6 日露歴史研究センターの功績と解散

●白井久弥・渡部富哉ら日露歴史研究センターの貢献に学ぶもの

①『偽りの烙印』での「伊藤律端緒説」批判の画期性と方法

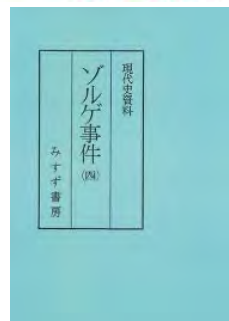
②ゾルゲ事件から中共諜報団事件・満洲合作社事件・満鉄調査部事件への視野拡張（米国共産党・企画院事件・横浜事件にも）

③野沢房二・木元伝一・光永源槌ら周辺からの新資料発掘

④国際シンポジウム9回・翻訳集50号・講演会等ネットワーク構築



知性の巨人 石堂清倫氏
(遺著『戦後が真実の昭和史』より)



三 情報戦としての尾崎=ゾルゲ研究

— 19C機動戦 ⇒ 20C陣地戦 ⇒ 21C情報戦、
日独伊枢軸・占領・冷戦・日米同盟のなかで
1 朝日新聞1942年5月17日司法省発表（情報統制）
毎日2018年8月18日 ↓ 朝日12月25日 ↓

朝日新聞

我が潜水艦の敵船舶撃沈 開戦以来六十五隻に達す

合計實に四十四萬四千トン

（本紙記者の調査）我が潜水艦は開戦以來、敵船舶を六十五隻撃沈し、合計實に四十四萬四千トンの戦果を挙げた。これは開戦以來の戦果としては、空前の偉業である。この戦果は、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。特に、最近の戦果は、敵の補給線を断つことに成功し、その戦果は、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

米の虚構發表覆る

コレビドール島等の戦果

（本紙記者の調査）米軍は、コレビドール島等の戦果を、虚構として発表した。これは、米軍の戦果を誇示するための虚構である。我が潜水艦は、コレビドール島等の戦果を、実証的に証明した。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。



比島作戦に御参加

（本紙記者の調査）比島作戦に御参加した。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

歴史は海上権を繞る

五ヶ月の戦果戦局を決す

（本紙記者の調査）歴史は海上権を繞る。五ヶ月の戦果戦局を決す。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

神速雲南の騰越占領

兵器等莫大な資材擄獲

（本紙記者の調査）神速雲南の騰越占領。兵器等莫大な資材擄獲。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

国際諜報團檢舉さる

内外人五名が首魁

（本紙記者の調査）国際諜報團檢舉さる。内外人五名が首魁。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

第一銀行

長年の概算披露

（本紙記者の調査）第一銀行の長年の概算を披露した。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

ゾルゲ事件報道統制文書

旧司法省幹部手控え発見

「4段組み以下、写真なし」

（本紙記者の調査）ゾルゲ事件報道統制文書。旧司法省幹部手控え発見。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

戦時「思想検事」の秘蔵文書

故太田耐造氏ゾルゲ事件捜査

研究者「新事実の可能性」

情報統制の「代表格」1104点公開

（本紙記者の調査）戦時「思想検事」の秘蔵文書。故太田耐造氏ゾルゲ事件捜査。研究者「新事実の可能性」。情報統制の「代表格」1104点公開。これは、我が潜水艦の戦術的進歩と、敵船舶の脆弱性を示している。

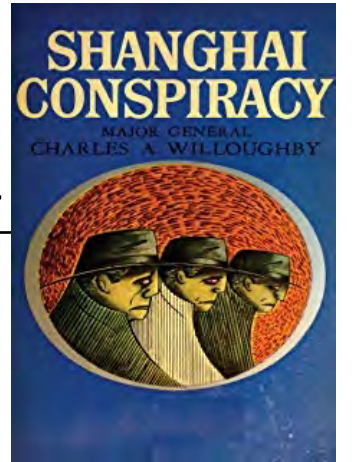
2 戦後日本のゾルゲ事件イメージの出発＝尾崎秀実獄中書簡からGHQ・G2ウィロビー報告（1949年2月陸軍省発表）へ



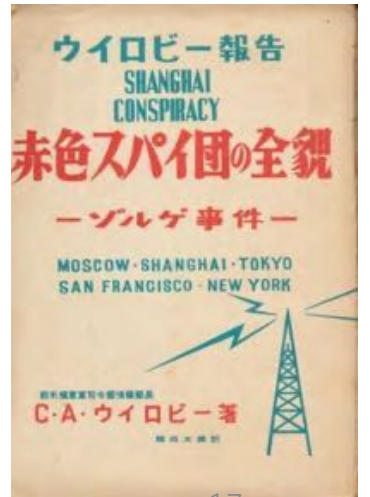
先人の勇気と知恵



- 尾崎秀実『愛情はふる星のごとく』1946ベストセラーにより、「反ファッショ戦士」ゾルゲ・「反戦平和の愛国者」尾崎秀実イメージ
- 1949年2月米国「マッカーシズム」、日本「逆コース」開始期に、ウィロビー報告による「ソ連の赤色スパイ」ゾルゲ諜報団告発



- ①英語原題「上海の陰謀」のように、もともと中国内戦共産党勝利への中国時代を含めたゾルゲ諜報団告発、日本について尾崎秀実は売国者へ、当時の共産党躍進に対する「伊藤律自白端緒説」、
- ②それに便乗したレッドページ・日本共産党分裂促進、尾崎秀樹「生きているユダ」、松本清張「革命を売る男」による伊藤律「スパイ」説、
- ③ソ連は1964年の「大祖国戦争の英雄ゾルゲ」まで沈黙・「赤色スパイ事件」「伊藤律端緒説」の定着

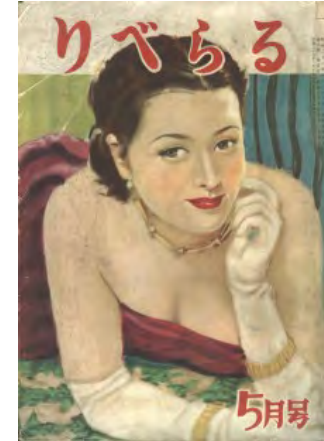


時局雑誌/大衆文化の媒介：「政界ジープ」 vs. 「真相」

←総合誌

時局誌

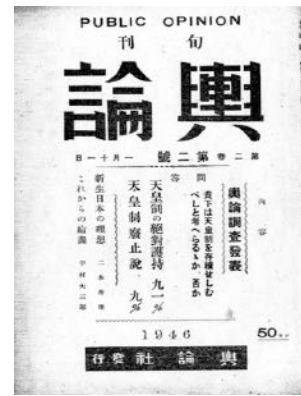
娯楽誌→



3←系譜 岩波書店

出自

系譜→



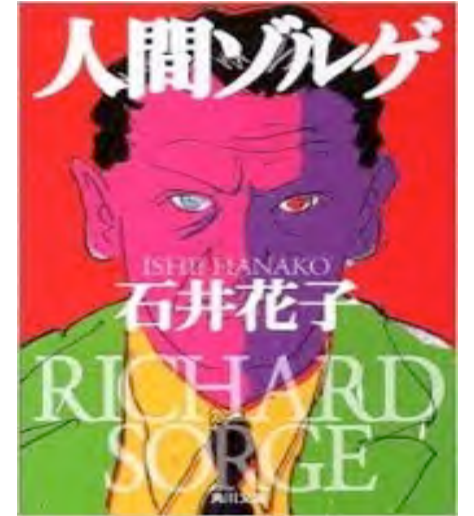
典型性 = 「真相」「政界ジープ」両誌は10年約100号継続、公称10万部、スタイル酷似

(土屋礼子によれば『レポート』49.12「時局雑誌を洗う」から『真相』『旋風』『政界ジープ』『日本週報』が代表)

1949.2ウィロビー報告前にゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」と名付けた731部隊二木秀雄の『政界ジープ』1948.10



「ゾルゲの遺体がどこにあるのか、どこに埋葬されているのかということは公表されませんでしたし、全然わかりませんでした。ところが、昭和23年の10月だったと思いますが、『政界ジープ』っていう雑誌に“尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相”という記事が出ているのを見つけて買って帰ったんです。...その記事のなかに、ゾルゲの遺体は引き取り手がなくて、拘置所が雑司が谷の共同墓地に土葬して、そこにささやかな木の墓標を立てたというのがある…」 (石井花子)



GHQによるゾルゲ事件捜査と米本国の「赤狩り」

●戦後、政治犯釈放を積極的にすすめたのは、民主化を進めたGSに近かった民間諜報局（CIS）のE・R・ソープ准将だった。彼はのちに非米活動調査委員会に喚問されたオーエン・フレイモア（中国問題の研究者）の証人になった。これに反抗し、ソープ帰国後はCISも配下にするG2ウィロビー少将は。キャノン機関の下ドイツ大使館捜索や政治犯釈放リストから、ゾルゲ・スパイ団と米国共産党員、特にカルフォルニア党との繋がりを独自調査。

●1945年10月7日 栃木女子刑務所よりマクス・クラウゼンの妻、アンナが釈放される。1945年10月9日 秋田刑務所よりマクス・クラウゼンが釈放され、心臓病の治療のため、秋田日赤病院に入院中、対敵諜報部Bシンプソンの尋問を受ける。クラウゼの体力が回復すると連合軍の専用列車で東京に送り帰され、浅沼弁護士を介して妻のアンナと連絡がつく。

●1945年10月24日 東京のソ連諜報員からの連絡で、「フリッツ（クラウゼンの暗号名）とアンナ・クラウゼンが本部を訪れ、ゾルゲの活動の軌跡を報告したと毛スタワに通報される。1945年12月クラウゼンはソ連軍用機でウランオストクに脱出。

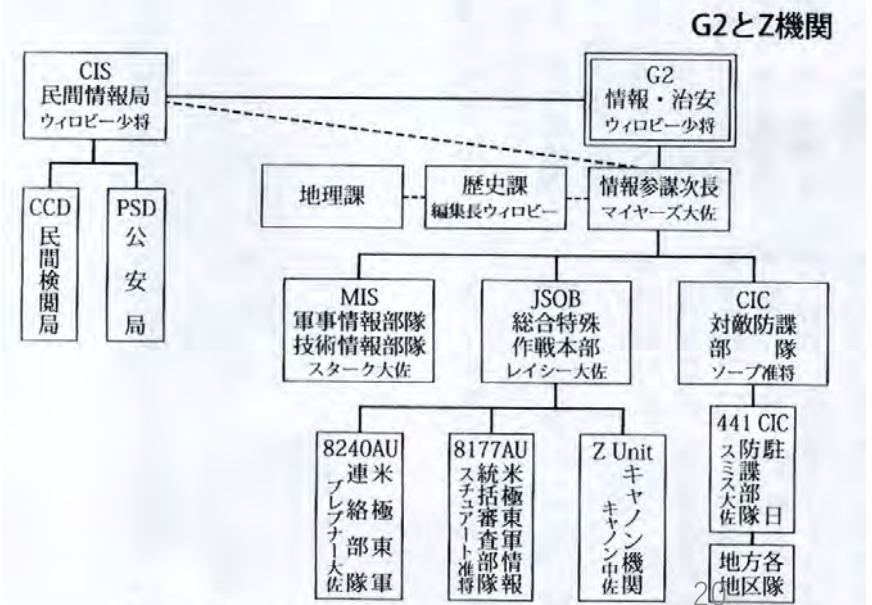
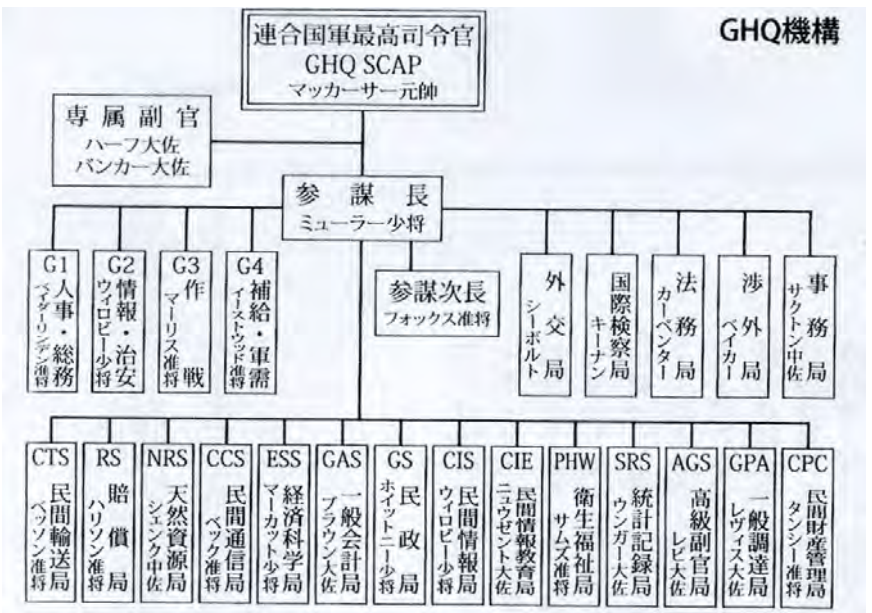
●1946年春 ソープ准将（CIS）配下のT・Pディビス中佐は「ゾルゲ事件」の調査を開始。日本司法省刑事局の「ゾルゲ手記」など『ゾルゲ事件報告書』を入手し、報告書をワシントンに送る。1947年6月 CISはゾルゲ機関の組織図、情報ルート表を作成。

●1947年8月5日 民間諜報局ポール・ラッシュ作成資料報告書（白井久也編『米国公文書 ゾルゲ事件資料集』社会評論社、2007）

●1947年12月15日 民間諜報局のH・Tノーブル博士執筆の「ゾルゲ・スパイ団の極東における国際諜報の一例の研究」が、伊藤律の関与を含めて、「民間諜報部紀要」23号に掲載。カナダの原爆スパイ事件（グシェンコ事件）の教材に。

●1948年6-7月米国での非米活動委員会、米国大使館員のソ連での諜報活動非難に対する論駁材料として、日本における共産党諜報事件を「ソ連が米政府内にその細胞を作ったように、ソ連は日本政府にも共産主義細胞を植え付けた」と。

●1949年2月10日陸軍省発表、在英スドレーの抗議でポール・ラッシュが川合貞吉訪問、伊藤律の名を挙げ、月2万円で米軍共産党用エージェントに。



(出典：延植『キャノン機関からの証言』番町書房、1973年、71頁をもとに作成)

GHQ・G2 ウィロビー報告の役割

――マッカーシズムのさなか、荒木光子とポール・ラッシュが作った日米「スパイ」イメージの原型



沢田ハウスで開いたポール退役記念パーティ。左からポール、吉田首相、ウィロビー少将、松平参院議長



- G2歴史課荒木光太郎・光子夫妻とゴードン・プランゲ
- ポール・ラッシュ=戦前立教大学・聖公会牧師、陸軍日本語教師、CIS文書課長・戦犯リスト作成、「清里の父」「アメリカン・フットボールの父」

「ワイルズ著『東京旋風』にこうある。「当然追放されるはずの軍人に、ドイツの駐在武官だった河辺虎四郎と、陸軍情報部長だった有末精三という陸軍中將がいた。この2人はドイツ語で（G2トップの）ウィロビーと話し合った。」

ウィロビーはドイツ生まれで、名前は元はワイデンバッハだった。保護された軍人には、服部卓四郎大佐もおり、彼は元東條英機の秘書官で、参謀本部の作戦課長をしていた。日本海軍で保護された筆頭は、中村亀三郎中將と大前敏一大佐だ。

他にも、かつてドイツに派遣された荒木光太郎教授と、その夫人光子も厚遇を受けた。荒木光子は郵船ビルで個室を与えられ、ウィロビーの厚遇を受けて「郵船ビルの淀君」と噂された。

GHQには「歴史課」というセクションがあり、戦史の編纂をする名目になっていたが、ここには旧軍人が多く雇われており、本当の仕事はソ連の諜報と推測される。」（松本清張「日本の黒い霧」）

・尾崎秀樹・川合貞吉の「尾崎・ゾルゲ事件真相究明会」は、ウィロビー報告の仕掛けた、伊藤律の供述により北林トモに始まるゾルゲ諜報団総検挙につながったとする「伊藤律=意識せざるユダ」端緒説に従い、伊藤を幹部とした当時の日本共産党の責任を追及し、「伊藤律=意識的ユダ=占領軍に革命を売った男」説へと転回していった。実際は川合貞吉こそ「ユダ」で、月2万円でCIAに身を売った（渡部富哉『偽りの烙印』と加藤『ゾルゲ事件』）



「郵船ビルの淀君」 荒木光子と川合貞吉の ラッシュ、プランゲへの証言から陰謀論へ

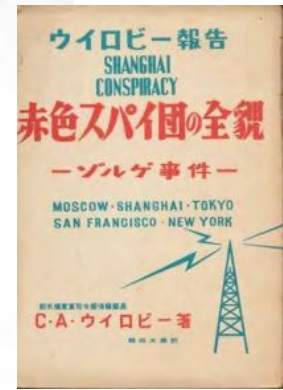


小尾俊人「本が生まれる。そして44年」(2003)

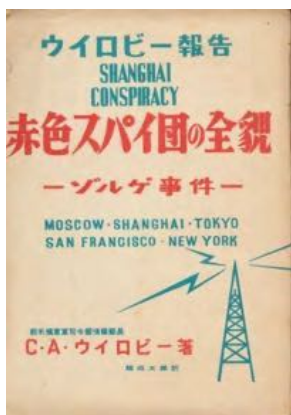
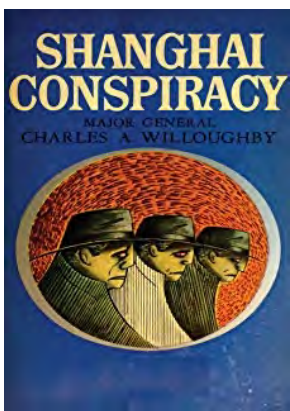
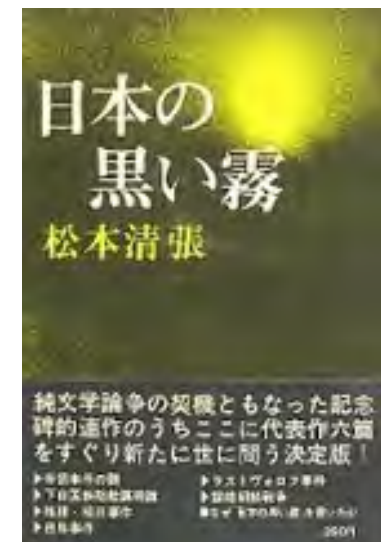
出版者からみた戦前と戦後

ります。この文面からすぐわかることは、荒木夫妻はウイロビーの情報活動の手足だったということ、また CIAの手先でもあったということが一つ。さらに、日本軍の再編成に備えるため、彼らの部局が旧日本軍のエリートを網羅していたこと。米ソ対立の最先端として日本再軍備の参謀本部をつくらうとしていたことでもあります。組織的オーガナイザーであったということです。このウイロビーは、当時カナダ主席——連合国の一国であるカナダの代表部ですね、その主席であったハーバート・ノーマン、あの「日本における近代国家の成立」という本を書いたノーマンを、いつもたいへん敬祝していた。そして終局的には自殺にまで追いやって。ノーマンに任せ、またノーマンの著作の翻訳者としても有名な大塚憲二さんに「一九四八年の秋であった」という文章があります。IPR——アカの果敢として当時アメリカの両院の非米活動委員会からマークされていた太平洋問題調査会——そのIPRの事務局長のカーターが、アジア旅行のさいに香港からノーマンあてに電報を送ったんですね。羽田でちょっと会いたい、という文面です。電報は当然ウイロビーの監視下にあるのですが、ノーマンは自分のところの三等書記官と大塚氏とを連れて、出かけて行った。「その羽田でノーマンが平服の眼つきの鋭い男たちに遠まき監視されていることに私は気づいた。かれらはそれをかくそうともしなかったばかりか、私の書類箱はかれらの一人によって検査されさえたのである。さすが外国の首席代表自身には何の手出しもできなかったが、私はノーマンの困惑した不快な表情を見送すことはできなかったし、容易ならざる空気を感じたものであった。今日から思えば、FBIのファイルが開かれて以来、一九四五年末のアメリカシリア事件、またカナダのグーゼンコ事件もあり、「悪い手」はノーマンを疑い、ずっと狙いつづけていたであろう。むしろ、そう推理するのが当然である」。ハーバート・ノーマン全集(四巻解説、岩波書店)。大塚さんはそう書いております。また別の証言者として渡辺一夫というプラン

が、見当をつけて拡大機にかけて見ていきますと、そのなかから実に驚くべき手紙の控えが出てまいりました。ウイロビーが日本人の荒木光太郎・光子という夫婦にあてた二通の手紙です。ウイロビーというのはプランゲの上官です。この発信者・受信者、それぞれの背後に横たわる世界、あるいは歴史があるわけで、両方のバックグラウンドをちょっと見てみたいと思います。まずウイロビーというのはどういう人間であるか。彼はマッカーサー司令部の情報検閲・課報の最大のプロです。そして占領中G2と呼ばれる部局の責任者であり、プランゲをメリランド大学から日本に呼び寄せ、いわゆるマッカーサー戦史の編集主任にすえた人物であります。ウイロビーはマッカーサーの絶大な信頼を受け、彼もまた献身的な尊敬をマッカーサーにもっておりました。ですからマッカーサーがトルーマンによって解任されるやいなや、彼も追って職を離れ、アメリカに帰りました。このマッカーサー解任劇は、つまり文官が武官に優越するというデモクラシーの実例、あらゆるものに先立つデモクラシーの实物教育であると日本人は当時感じただけであります。いかなる説教にもまさって強烈な印象を与えました。一方ウイロビーは在職時代、彼にもっとも近い関係にありプランゲの下にいたのは荒木光太郎・光子夫妻です。彼らが書いたウイロビーあての手紙はありません。ただウイロビーが彼らの質問に答えて書いた手紙があるだけです。その一九四九年九月の手紙には、「あなたがたのCIAとの今までの協力に鑑み、この件につきCIAがあなたがたの偉大な経験をこれからも有用なものとするに信じております。それからこの民間資料局——CHSですね——の主な使命は共産主義に反対し、軍人精神、ミリタリー・スピリットを維持し、未来の日本軍のために復讐することであり、この高貴でありかつ現実的な目的は十分に達成されております。あなたがたのこの仕事に対する貢献は賞賛すべきもの (meritorious) であって、そのことを主張するにいきさかの躊躇もありません。そういう言葉がある



3 1950年代大衆文化＝ウィロビー報告から石井花子・川合貞吉 尾崎秀樹・松本清張のゾルゲ像へ＝伊藤律「生きているユダ」



日米対ソ謀報共有のための戦後版『外事警察資料』第3巻5号1957.1 (みすず書房『現代史資料』全3巻、1962の原型)

- 米国国立公文書館 (NARA) 所蔵 CIC 「関三次郎ファイル」には1955年警察庁警備部作成の外事警察資料第1巻第2号「関三次郎及び P・K1403 事件」が入っている)
- それによると、第1巻1号は鹿地亘・三橋正夫事件。しかし、1巻3号から2巻、3巻5号までの日米共通公安事件が何であったかわからない

ゾルゲを中心とする1巻

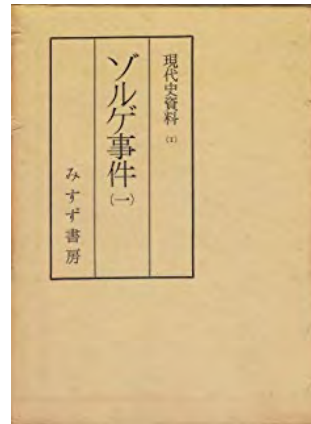
部外秘

ゾルゲを中心とする国際諜報団事件

警察庁警備部

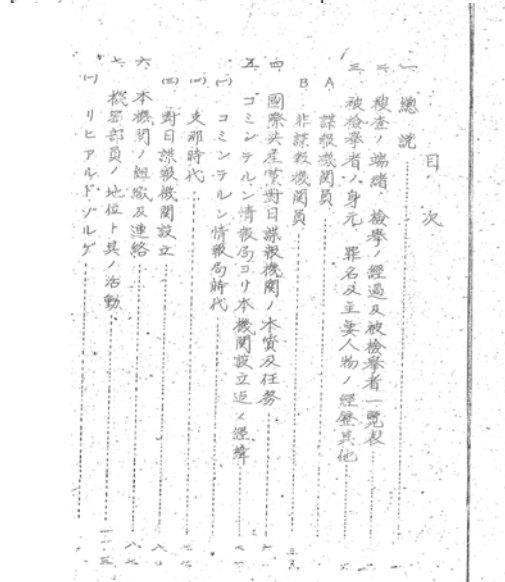
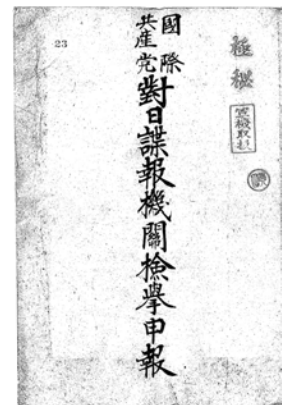
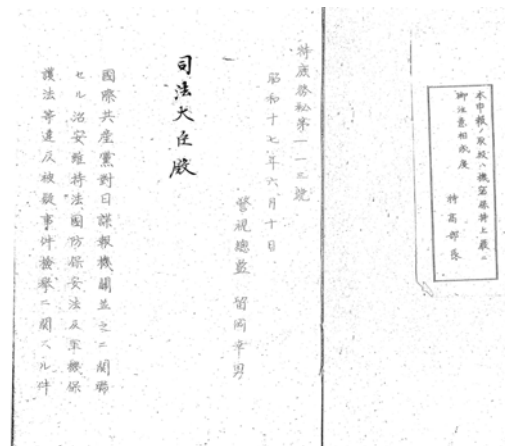
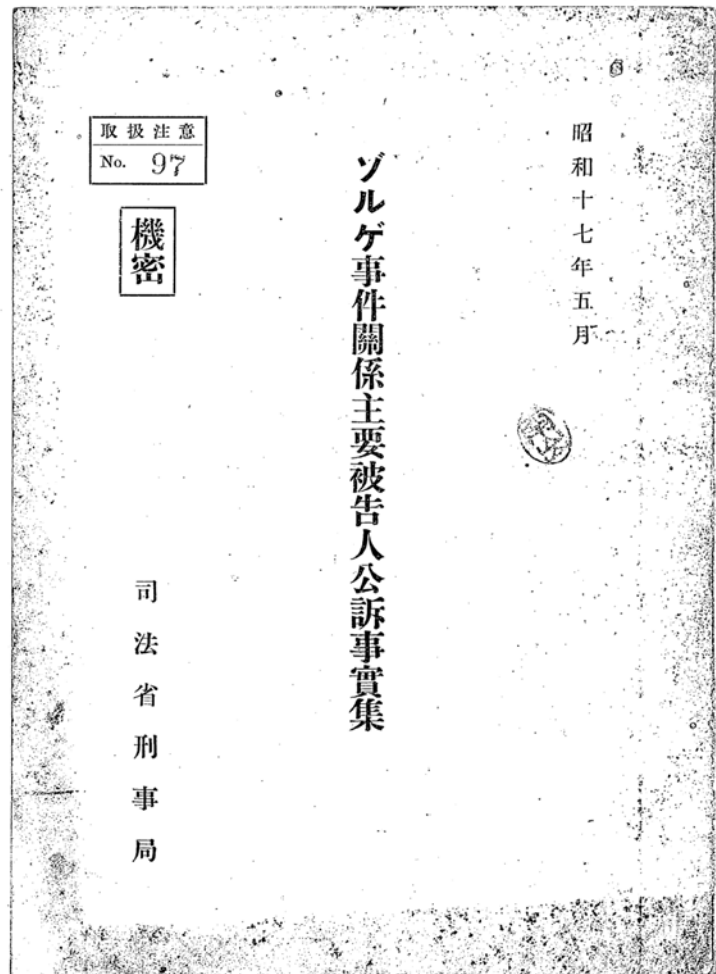
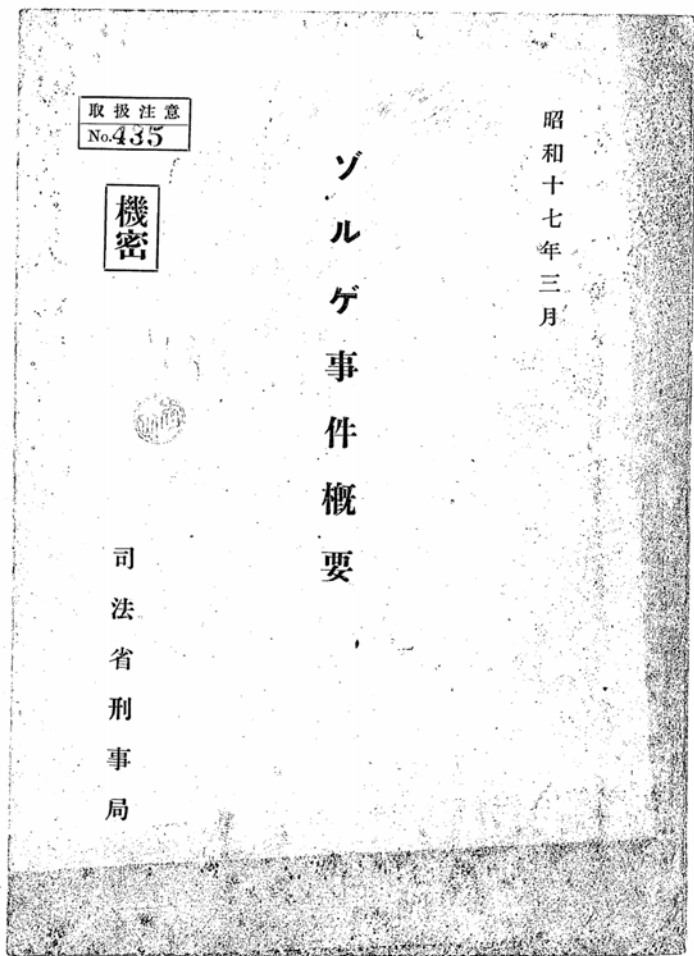
1巻-0001

外事警察資料 第三巻五号
昭和三十一年一月



- 54年1月にはラストボロフ事件発覚。警視庁公安部作成「部外秘 外事警察資料」1969年4月には、ソ連代表部 KGB 要員ラストボロフが米国 CIA に寝返ったさいに供述した日本人エージェント36人の実名がある。
- これらの現物はなげなこの国会の図書にのみ、国会図書・大蔵省の図書にあり、国会図書にないものは、国会図書にない。国会図書にないものは、国会図書にない。

1942年3月司法省「ゾルゲ事件概要」 + 西園寺・犬養5月「公訴事實集」
 = 6月10日「検挙申報」 = 8月『特高月報』「ゾルゲを中心とする国際謀報
 団事件」 → 1957警察庁「外事警察資料」 → 62.8「現代史資料」第1巻巻頭

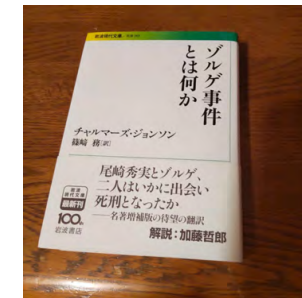
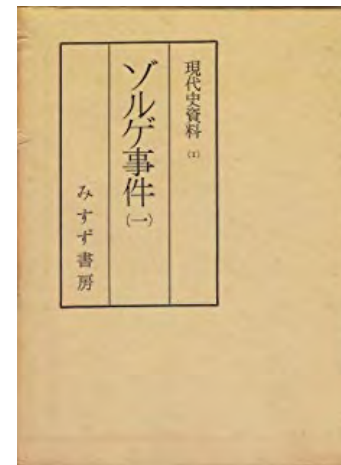


4 1960年代『現代史資料』刊行とソ連でのゾルゲ名誉回復——大衆文化から歴史研究へ

・1962年8月の『現代史資料 ゾルゲ事件』刊行は、『歴史学研究』63年4月号で歴史学者藤原彰により書評され、新たな尾崎=ゾルゲ研究の基礎資料とされた。これを見て、米国の中国革命研究者チャルマーズ・ジョンソンは尾崎秀実研究に入る。



・スターリン体制の時代には見向きもされなかったゾルゲが、1964年、当時のフルシチョフ・ソ連共産党第一書記の肝煎りで突如として「ソ連邦英雄」の称号が贈られたのを契機として、堰をきったようにゾルゲブームが起こった。ゾルゲ名称の通り、学校、記念館、公園、モニュメントの建設、オペラ、演劇のほか新聞、雑誌、関係記事の掲載、関係者の回想録、伝記などであふれた。それは今日までつづいている。



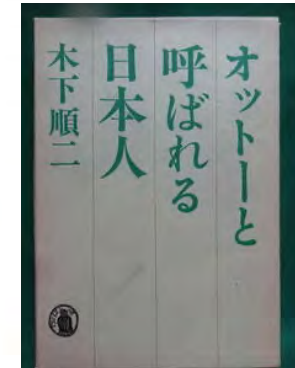
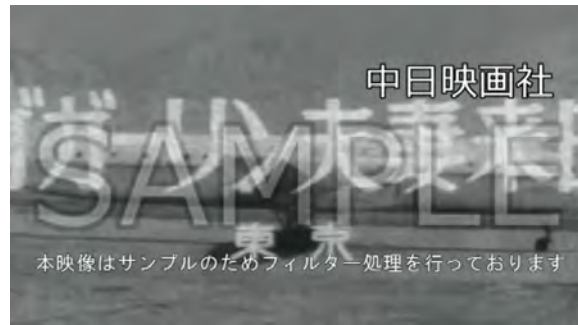
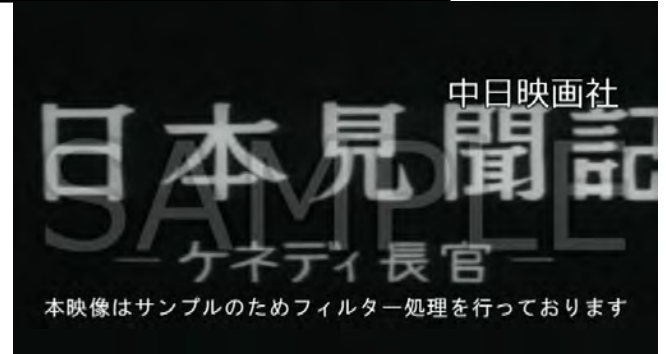
岸恵子発案の映画『真珠湾前夜』 1961の役割

- 最近刊行された『岸恵子自伝』（岩波書店、2021年）によれば、当時の夫であったイヴ・シャンピ監督にゾルゲ事件の映画化を提案したのは、主演女優になった岸恵子自身であった。1961年に欧州で封切られ評判になった *Qui êtes-vous, Monsieur Sorge?* (邦題『スパイ・ゾルゲ/真珠湾前夜』、松竹1961)は、一旦モスクワ国際映画祭出品が税関検閲で拒否されたが、時の在仏ソ連大使が直接クレムリンに持ち込み、1964年にフルシチョフ第一書記によるゾルゲの名誉回復、「ソ連邦英雄」称号授与につながった。
- ソ連でも映画は大ヒットし、夫妻はフルシチョフの招待でソ連国内を旅することができた。ただし映画の内容は、ゾルゲの反ファシズムに感動した岸恵子の企図とは裏腹に、「思想的に正反対」の脚本によるメロドラマになってしまったという。
- つまり、岸恵子がいなければ、そもそもこの映画はこの世に存在しなかった。ソ連におけるゾルゲの名誉回復や再評価もその文脈に照らして見ることができる。プーチンがこの映画をみてKGB諜報員を志したともいわれ、ソ連のインテリジェンスにとって重要な意味を持った。



背景 = 1962年2月のR・ケネディ vs. 5月ガガーリン来日 1962.10キューバ・ミサイル危機と米ソ情報戦激化

- 1962年2月、米国司法長官ロバート・ケネディがライシャワー大使のいる日本へ、早稲田大隈講堂で60年安保後の学生たちの抗議。
- 5月社会党他超党派でソ連宇宙飛行士ガガーリン来日、大隈講堂で大歓迎、自民党松本俊一代議士（台湾生まれのリベラル派外交官、日ソ国交回復時全権代表、岸内閣内閣官房副長官）からなぜソ連はソルゲを忘却したのかとソルゲ謀報団を紹介され、感激したガガーリンは、フルシチョフに伝えると約束。
- 8月 みすず書房「現代史資料1 ソルゲ事件 1」発刊
- 10月、キューバ危機で平和共存から最緊張へ、謀報の役割増大。
- 木下順二「オットーと呼ばれる日本人」1962発表・初演
- (↑1961 日本共産党宮本綱領、ソルゲ事件も伊藤律も無関係＝脱政治化)



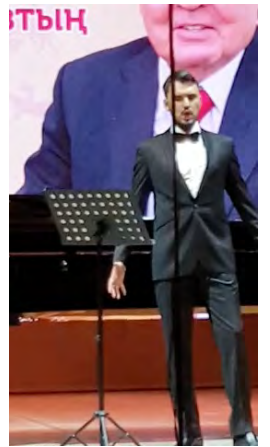
軍歌同志ゾルゲТоварищ Зорге

作曲: V.ムラデーリ (Мурадели, Вано Ильич)

作詞: B.ドヴォルヌイ (Дворный, Борис)

- 日本で活動し刑死したソ連のスパイ、リヒャルト・ゾルゲに関する1964年の歌です。ソ連は戦後も長らく事件への関与やスパイの存在を否定してきましたが、1964年9月4日付の『プラウダ』・『イズベスチヤ』両紙で突如その生涯が 대중に対して明らかにされました。直後から一大宣伝キャンペーンが始まり、多数の出版物、歌、戯曲、オペラが作られ、11月5日にはゾルゲにソ連邦英雄の称号が与えられました。
- ナチスとの戦いを裏から支えた英雄の存在がプロパガンダ上好都合であった事はもちろんですが、当時西側では既に通俗映画(日仏合作映画『スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜』)などの題材として事件が周知の事実となっていたという事も、事件の公表を後押ししたと言われています
- 宇宙飛行士ガガーリンが1962年の来日で初めてゾルゲの存在を知り、政府上層部に対し公表を働きかけたという興味深いエピソードも伝わっています。
- 群青の空の下、夜の静寂の中 日本の家の中、畳の上で
男が夢に見ている ロシアを、太陽の下目覚めるモスクワを
- 広き故郷の野を ヴォルガの白樺を夢見て
遠き異国の地で 祖国の為、同志ゾルゲは生きた
- 病んだ心臓の如く静かに 無線がコールサインを告げ
男はロシアと会話する 死と隣り合わせの夜に
- 時には怒りを笑みで隠し 眼光鋭く何処でも警戒し
異国に在っても故郷の地の為 その身を惜しまぬ同志ゾルゲ
- 最期の時まで実直に、力強く 地球の平和の為、死へと向かっていった 母なるロシアの夢を抱きつつ 不朽の栄光となったのだ

甦るオペラ「リヒャルト・ゾルゲ」



「ロシア・ピアニズムの贈り物」(みすず書房、2014年)の著者でベルリン在住のピアニスト原田英代さんの義父、ドイツ国籍のソ連在住者であったOskar Vendelinovich Heylfus (1933-1981)は、作曲家、音楽教師で、対独戦勝利30周年の1975年に、オペラ「ゾルゲ」を作曲し上演した。リブレットはカザフスタンの民族詩人オルジャス・スレイメノフ。ドイツに亡命する1980年までは、幾度か上演された。しかし作曲者は1980年に東ドイツに、1981年には西ドイツに移住した直後に交通事故?で不審死。ソ連・ロシアでオスカー・ハイルフェスの名前は嫌われ、彼の作品は劇場、テレビ、ラジオ、ミュージカル・ディレクターリーのレパートリーから即座に削除された。

・しかし、ソ連から独立したカザフスタンでは生きていた。オルジャス・スレイメノフ 台本 オスカー・ハイルフェス 作曲のオペラ「ゾルゲ」は、2021年5月18日にオジャス・スレイマノフ 85歳祝賀コンサートでアバヤ国立バレーオペラ劇場歌手エミール・サカボフが歌う。

5 1970-80年代 独ソ戦情報と日本御前会議南進情報の争点化、伊藤律生還と端緒説への疑問、多様な関係者登場、「スパイ」の政治的評価分岐



1977-79/89



1974



1975/84



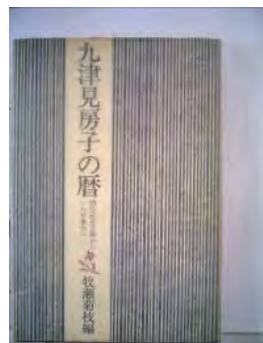
1967/88



伊藤律
1980.9
帰国



1993・



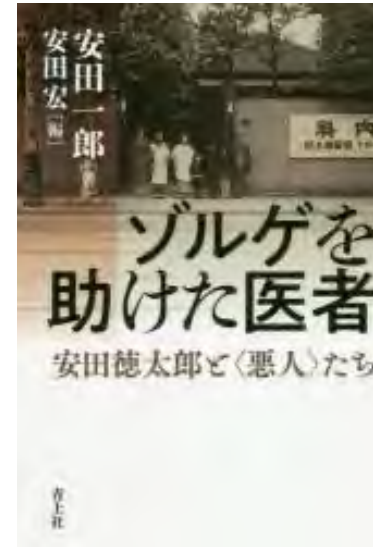
1976



1980



1997-2000



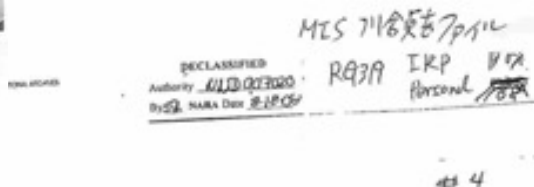
ソ連崩壊後、21世紀に日米露周辺資料・証言・研究頻出、しかし関係者・読者高齢化



6 日露歴史研究センターの功績 = 伊藤律端緒説の崩壊 =



沢田ハウスで開いたポール退役記念パーティ。左からポール、吉田首相、ウィロビー少将、松平参院議長



Mr. KAMEI, Sadakichi
Tokyo-To, Kita-Yam-Gun,
Mitaka-machi,
Shirorenjaku No. 395

Interview with G-2, SCAP representatives this date re Gorge Case and Mrs. Agnes Smedley's connection with Ozaki and Gorge. Mr. Kamei was tried, convicted and sentenced by Jap Court for his activities with Dr. Richard Gorge. He was released from Jap prison by U. S. occupation forces in 1945.

19 February 1949

I certify that this picture was taken on 16 February 1949 and is of the person or persons listed above.

Negatives on file Central Files, G-2 Sec, SCAP.



加藤 巨郎

ゾルゲ事件

覆された神話

崩壊した「伊藤律スパイ説」
革命を売ったのは誰であったか？
史料共産党日本人部の知られざる活動など、
新資料をもとに事件の謎を追究。

100

平凡社新書

日本の黒い霧

松本清張

戦後日本で起きた
怪事件の数々に
松本清張が挑む

NHKスペシャル最新文庫事件 File 09
松本清張の傑作選

父・伊藤律

ある家族の「戦後」

スパイ説は、もはや完全に否定された！

30年の空白を乗り越えふたたび結びついた家族の雪冤の記録。

伊藤律スパイ説修正

内部文書発掘で判明

捜査関係者ら「ねつ造断言

ネタもと↓GHQスパイ

「ゾルゲ事件」の真相をめぐり、戦後70年を超えて、伊藤律のスパイ説が崩壊した。内部文書の発掘で、伊藤律がソルゲの口から出た「ソルゲ事件の真相」といわれる「ソルゲ事件」の真相が明らかになった。伊藤律は「革命を売った男」と指弾されたが、実際は「革命を売った男」ではなく、GHQのスパイだったことが判明した。伊藤律は「革命を売った男」ではなく、GHQのスパイだったことが判明した。伊藤律は「革命を売った男」ではなく、GHQのスパイだったことが判明した。

「ソルゲ事件」の真相をめぐり、戦後70年を超えて、伊藤律のスパイ説が崩壊した。内部文書の発掘で、伊藤律がソルゲの口から出た「ソルゲ事件の真相」といわれる「ソルゲ事件」の真相が明らかになった。伊藤律は「革命を売った男」と指弾されたが、実際は「革命を売った男」ではなく、GHQのスパイだったことが判明した。伊藤律は「革命を売った男」ではなく、GHQのスパイだったことが判明した。

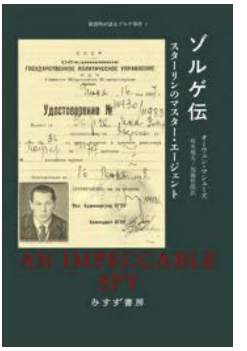


次男の伊藤浩二さん（左）と長男の伊藤律さん（右）の25周年忌に、成田空港で開かれた追悼式の様子。伊藤浩二さんは1980年9月4日、成田空港で死去した。



四 新段階での論点・争点

1 ゴルゲの独ソ戦・南進情報打電の意義



ファッション資料集の意味 (名越健郎訳)

① ゴルゲの通信ばかりでなく、モスクワでの受信とその担当者・送付範囲・情報評価、赤軍情報部内でのゾルゲ評価の分かれまでが出ているが、独ソ戦情報10本以上は「疑わしい」と信頼されず、スターリンに無視された。

②二重スパイの疑いのもとで、独ソ戦情報はゾルゲ情報の信頼性回復に役立ち、南進情報は9月以降に高評価。ゾルゲが日本軍の南進方針を通報したことで、ソ連は精強のシベリア部隊を西部に移動させ、戦局転換につながったとする説は、一連の文書からは確認できなかった (名越)。

③日本軍の地理的配置、師団編制、指導的軍人名、軍備・航空機など軍事情報への強い関心、「すぐれた軍人エージェント獲得」の未達成、決定的な時期に無線技士クラウゼンのサボタージュ。

④東京に6人のソ連GRUスパイ (トップ=グシェンコ武官、在日ドイツ大使館女性イリアダ、イスパリン、イバ、イーラ、マロン、在日米国大使館に26歳のユダヤ系米国人女性カルメン。ゾルゲは別に「親日」ではなかった (名越)。

⑤主要メンバー5人の中でもゾルゲ・尾崎・クラウゼンと、ブケリッチ・宮城の二重構造。頻繁な会計報告・送金要求 (40年11月の支出は4180円、この中から尾崎に200円、宮城に420円。当時の大卒初任給は70-80円)

マッシュューズ『ゾルゲ伝』から

①「『赤軍が敗北すれば、日本軍が参戦することは間違いなく、敗北しなければ、中立を保つだろう』とゾルゲは書いている。」「軍文書館に保管されているこの電報には、モロトフ、ベリヤ、ボロシロフ陸軍大将のイニシャルと並んで、スターリンのイニシャルが記されている。」「政治局やソ連軍のトップである第四部がようやくゾルゲの情報を信用し始めた…。9月末になると極東軍管区から大量の部隊が移動し始め、ヨーロッパ・ロシアの平原でドイツ軍と戦うことになった。…スターリンはシベリアの兵力の半分以上をモスクワ防衛に振り向けることになった」

②ゾルゲは、日米開戦の三か月前、それが不可避であることを見抜いていた。

③「1941年夏、日本がソ連を攻撃すれば、スターリン政権は終わりを告げ、第二次世界大戦の結末はまったく変わったものになったであろう」とまで言えるのか？

④張鼓峰事件・ノモンハン事件の中央軍文書館資料による詳述、ただし日本・中国の研究状況は無視。例えばプランゲの集めた特高・川合貞吉・荒木光子・石井花子証言への過剰依存。

ゾルゲ情報は日本側が恐れたほどに重要だったのか？

- ゾルゲ事件 = 1941.3治安維持法改正と41.5国家保安法制定・軍機保護法改正半年後の大事件、その法規制定・改正・解釈・運用のすべてで「日本法理」の太田耐造が中心。
- 適用法規 = その初めての本格的執行
 - ① 治安維持法違反（1925年制定、1928年及び41年3月10日改正）、
 - ② 国防保安法違反（1941年3月7日制定、5月10日施行）、
 - ③ 軍機保護法違反（1899年施行、1937年及び41年3月10日改正）、
 - ④ 軍用資源秘密保護法違反（1939年3月25日施行）という四つの罪状で検挙・起訴。特に第一次捜査権で特高警察と攻防、「ゾルゲ事件」から「国際諜報団事件」に = 外諜委員会、国民精神総動員・相互監視の防諜「1941年体制」、「外国人を見たらスパイと思え」（瀨瀬厚『防諜政策と民衆』昭和出版,1991）
（林・和田・大八木「軍機保護法等の制定過程と問題点」『防衛研修所紀要』11巻1号、2011.12、内容は上記②③④の構成要件と制定・執行過程の研究ノート、2013特定秘密保護法準備）

今日的的政治的文脈

- 韓国の検察と警察、GSOMIA=軍事情報包括保護協定（現在7カ国）
- 志垣民郎『内閣調査室秘録』（文春新書）の東大土曜会と内調「現実主義」知識人127人工作、若泉敬と京産大岩畔豪雄
- 北村滋内閣情報官のNSS局長就任、
- ネオ・マッカーシズム = コミンテルン陰謀史観の台頭（江崎道朗）

今日的研究

- 田嶋信雄『日本陸軍の対ソ謀略』（吉川弘文館、2017）ノモンハン
- 『軍事史学』55-2(2019.9)宮杉浩泰論文ほか = 日独伊ソ同盟構想とソ軍「西走」
- 大木毅『独ソ戦』（岩波新書、2019）= 独ソ戦情報と日本軍南進、ソ連「西走」
- 小宮まゆみ『敵国人抑留』（吉川弘文館、2009）= 英米「敵国人」と独伊蘇「親善国人」の国防保安法・軍機保護法での扱い
- 富田武『日ソ戦争』（みすず書房、2019）

2 尾崎 = ゾルゲの全体像の再構築

The List of Published Works by Dr. Richard Sorge

June 2021 Prof. Tetsuro KATO(公開文書約300点)

1, Dr. Sorge funkt aus Tokyo von Julius Mader, Gerhard Stuchlik, Horst Pehnert (Berlin, 1966) and by Kiyotomo Ishido in Japanese (現代史資料4, Tokio 1971)

2 Jörg Becker, 43 Artikel von Richard Sorge in der „Bergischen Arbeiterstimme“ 1921-1922

3 Julius Mader in der DDR,

16記事 in ドイツ穀物新聞1930-1932

4 Richard Sorge's 231 articles in Frankfurter Zeitung 1936-1941,

collected by Prof. Erich Pauer at Marburg University

5 In Japanese, Katsube/Kitamura/Ishido eds.

勝部元・北村喜義・石堂清倫『リヒアルト・ゾルゲ 二つの危機と政治』御茶の水書房,1994

⇒ 知識人としてのゾルゲの再発見

6, 松田義男「尾崎秀実著作目録」には、今井清一作成『著作集』目録、『開戦前夜の近衛内閣』(青木書店)等に未収録のものを含め、新聞・雑誌掲載344篇・座談会33篇収録
<http://ymatsuda.kill.jp/Ozaki-mokuroku.pdf>

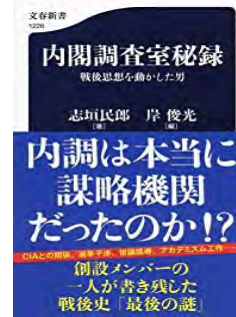
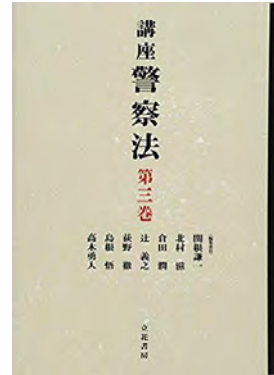


Seine Artikel in der Berliner «Deutschen Getreide-Zeitung» ließ er meist ungezeichnet, oder er versah sie nur mit solchen Versalien wie «J» (Johnson) und «I» (Ika).



3 戦前日本のインテリジェンス・コミュニティと 対ソ諜報の多頭制（米ソのインテリジェンスも同様）

- 1940年頃 = 天皇制内大臣府、情報局、外務省、大本営・陸海軍参謀・憲兵隊、内務省特高・外事、司法省思想検察、準アクターとして満鉄調査部、特務機関、中野学校など。
- ゾルゲ事件適用法規 = ①治安維持法（1925年制定、1928年及び41年3月10日改正）、②国防保安法（1941年5月10日施行）、③軍機保護法（1899年施行、1937年及び41年3月10日改正）、④軍用資源秘密保護法（1939年3月25日施行）



- 小林良樹「インテリジェンスと警察」 → 2014 日本版NSC
- 主要5組織 = 内閣情報調査室、外務省国際情報統括官、警察庁警備局公安警察、防衛省防衛政策局・情報本部、公安調査庁
- 拡大メンバー = 金融庁、財務相、経産省、海上保安庁
- 特定秘密保護法・新安保法制準拠、国家安全保障会議（NSC）、米国との関係、辺野古・選挙ヤジ排除・中韓人対策運用

日本側の防諜体制 憲兵隊とゾルゲ事件

全国憲友会連合会 『日本憲兵正史』 1976,pp.678-684.

震駭させたが、最も驚いたのはドイツ大使館の職員中、やはりオット大使である。オット大使はゾルゲが検挙されてからも、憲兵司令部を訪れて、中村憲兵司令官に信じ切れぬと執拗に抗議したほどであった。

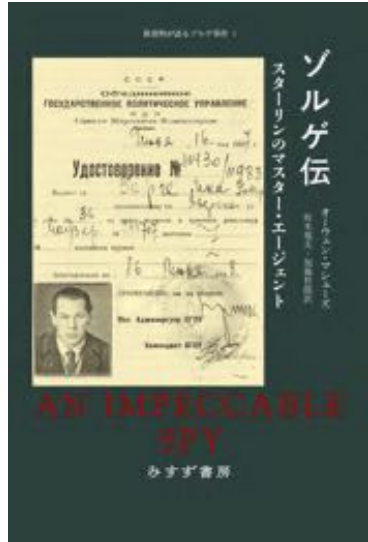
では、ゾルゲ事件に対して、憲兵隊は全く手も足も出なかったかという点、必ずしもそうではなかった。

当時、銀座の数寄屋橋際にローマイヤーというドイツ人経営のレストランがあった。ドイツ人の客が多かったのはいうまでもないが、日独の友好関係を隠れ蓑にして、ソ連の諜報網がここを舞台に暗躍するであろうということは、早くから東京憲兵隊の外事課の関係者は予想していた。担当は外事課の防諜班であったが、やがて憲兵隊のブラックリストに乗っている諜報容疑のドイツ人が頻々と出入していることをつかんだので、ひそかに偵察をつづけていると、ゾルゲも容疑ドイツ人と接触のあることが判明した。ようやく憲兵隊の監視の網にゾルゲが登場したのであった。

防諜班はゾルゲの尾行を徹底してつづけていくうちに、ゾルゲがドイツ大使館に出入し、館員とも親密に交際し、特にオット大使の信頼の厚いことがわかった。しかし、ゾルゲの行動はどうしても容疑が深まるばかりであった。そこで東京憲兵隊本部から、在日ゲシュタポ（ドイツ秘密警察）の代表者であるマイシンガー大佐に連絡したところが、マイシンガー大佐は、ゾルゲは絶対に間違いない人物であることを保証した。ここで防諜班はやむなくゾルゲの尾行を中止した。

ところが憲兵司令部直轄の無線探査班は、時折夜中の十二時頃から一時までの間にわたって、頻繁に発信される怪電波をキャッチしていた。（検挙後この電波がクラウゼンの発信していたものと判明した）東京のように人家が密集して接触している都会では、怪電波発信源の範囲を縮小することは非常に困難であった。結局、憲兵隊ではゾルゲ一味逮捕の名を警視庁にとられた。だが、憲兵隊も実はもう一步のところまでゾルゲを追詰めたが、マイシンガー大佐の保証を信頼したばかりに、網中の大魚を逸してしまったのであった。ゾルゲ事件は結局ゾルゲと尾崎秀実は死刑、宮城与徳、ブランコ、ブーチリッチ（ユーゴの写真技師）船越寿雄は後に獄死した。また他にドイツ人マックス・クラウゼン、日本関係者として河村好雄、川合貞雄らがいる。この事件は翌年四月まで関係者合計三十五人が検挙された。

軍機漏洩：スターリンは1932年に日本の生物兵器開発を知った



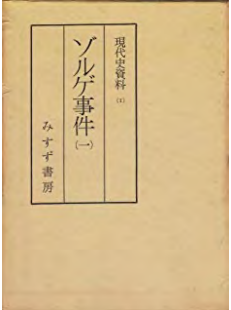
英文ベストセラーのマッシュューズ『ゾルゲ伝』（みすず）に、米インディアナ大黒宮広昭教授の研究として、ノモンハン時小松原道太郎中将の1927年エストニアでのハニートラップ以来ソ連スパイ説との関係で、1932年にスターリンは日本側の生物兵器計画を知っていたという説紹介（これまではクラウゼン供述中の1937年説）。

「1927年以降に小松原が赴任した先では、東京への誤報、ソ連情報部へのリークが相次いだ……小松原は1932年から34年までハルビンの日本特務機関長を務めていた。ポドルスクにあるロシア国防省中央文書館（TsAMO）には、小松原のハルビン駐在と同時期の、日本、中国、満州国に関する詳細な情報があるがそれ以前も以後もほとんどない。1933年、モスクワに日本の機密電報が届き、日本がソ連から中国東方鉄道を奪取する意図があることが暴露された。〈1939年夏ノモンハン時はない〉

また、無名の諜報員による秘密資料には、1932年8月、ハルビンで行われた東京参謀本部ロシア課長による、対ソ連兵器としての生物兵器の重要性に関する恐ろしい報告が含まれていた。この報告は非常に憂慮すべきもので、トウハチエフスキー元帥、スターリンは自ら読んだという。」

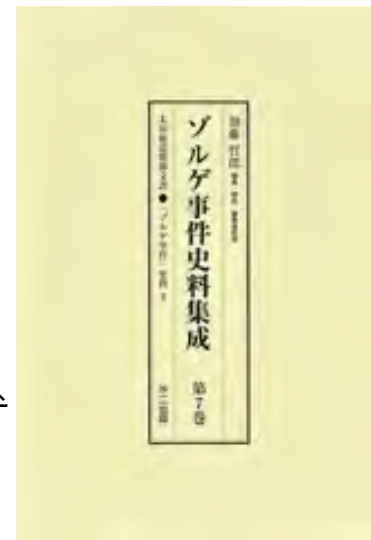


4 特高警察中心『現代史資料 ゾルゲ事件』と 思想検察『ゾルゲ事件史料集成：太田耐造関係文書』



- みすず『現代史史料』は印刷史料
- 1-3巻は警察庁警備部『外事警察史料』3巻5号(1957)1547頁の再編集
- 両者の重複は、警察・検察訊問調書などだが、意外に少ない、
- 外国人被告ゾルゲ・ブーケリッチ・クラウゼンの訊問記録はみすず『現代史資料』で、太田の1942年9月満洲国転勤のため裁判資料・判決文は『現代史資料』で、両者は併用すべき基礎資料
- 太田耐造はゾルゲ事件に適用された①治安維持法②国家保安法③軍機保護法④軍用資源秘密保護法の立法及直近改正の立役者。「日本法理」を背景に「国体護持」「みことのり」法解釈・執行の総責任者
- 特高警察は思想検事の指揮命令下の法的手続きによる「下部捜査機関」(大橋秀雄『真相ゾルゲ事件』p.85)=単純化すれば、共産主義取締の治安維持法中心の内務省資料と、国家機密漏洩の国防保安法・軍機保護法を主眼にした司法省資料の差異が浮上する

- 「太田耐造文書」は手書き・和文タイプのオリジナル
- 「思想検事」太田耐造のコレクション、2017年憲政資料室公開
- 昭和天皇への「上奏文」、内務省「ゾルゲを中心とする国際諜報団事件」の司法大臣宛原本「国際共産党対日諜報機関検挙申報」、水野成・田口右源太全尋問記録等捜査過程の新文書多数、各種草稿草案に修正・書込・コメント等あり
- 外諜史料、日共再建運動、中共諜報団事件など周辺史料も「太田耐造関連文書」に満載、治安維持法「目的遂行罪」「予防拘禁」などの事例
- 「上奏文」作成経緯・新聞発表文の検閲経緯からすると、内務省特高警察が手を出せなかった西園寺公一・犬養健による「御前会議」等重要国家機密情報漏洩を、42年3月以降に国防保安法・軍機保護法違反で立件する思想検察の狙い



太田耐造 = ゴルゲ事件時の代表的「思想検事」



萩野富士夫『思想検事』（岩波新書、2000年）によると、太田は

「1920年東大法学部卒、35年中国の思想情勢を視察。39年司法省刑事局第六課長となり、アジア太平洋戦争開戦前後の『思想検察』を指揮。41年の治安維持法改正や『思想検察規範』制定の中心人物。42年『満洲国』の招聘で司法部刑事局長となり、その『思想検察』の確立や法制の整備につとめた。45年司法省会計課長、46年甲府地裁検事正となる、公職追放」、1941新治安維持法で「検事が捜査の中枢機関」「司法警察官は単に斥候的任務」を画策

（思想検事について、黒井千次『流砂』）

（日本法理研究会については吾妻光俊「日本法理の探求：戦時法理論の回顧」『一橋論叢』16、1946.10）



1942年4月「御前會議」情報漏洩で上奏の必要

①ソ連赤軍、②政策形成関与の謀略、③西園寺公一・犬養健

勅許軌變方ノ件

昭和十七年四月 日

司法大臣 岩村通

内閣總理大臣 東條英機 殿

リヒアルト・ゾルゲ 獨逸人 當四十七年

マツクス・クラウゼン 同 當四十四年

ブランコド・ヴイケリツチ クロアチヤ人 當三十八年

尾崎秀實 當四十二年

宮城與徳 當四十年

右ノ者等ニ對スル治安維持法並ニ國防保安法違反等被疑事件ニ付テハ目下東京刑事地方裁判所檢事局ニ於テ鋭意捜査中ニ有之候處被疑者ゾルゲハソ聯邦赤軍諜報機關ノ指令ヲ受ケ昭和八年秋頃我國ノ國家機密其ノ他軍事外交財政經濟等ニ關スル各種情報並ニ軍事上ノ秘密及軍用資源秘密ヲ探知收集シテ之ヲ右赤軍諜報機關ニ通報漏泄スルコトヲ目的トシテ在日秘密諜報團體ヲ組織シ爾餘ノ被疑者等ハ孰レモ其ノ團體員トシテ加入シタルモノニシテ檢擧セラルルニ至ル迄ノ間各方面ノ人士等ニ巧ニ接近シテ廣汎ナル諜報

司法省

活動ヲ展開シ昭和十六年六月獨ソ開戦以降ニ於テハ特ニ我が基政策ニ關スル重要ナル各種情報ノ探知收集ニ全力ヲ傾倒スルニリ同年七月上旬頃被疑者尾崎秀實ハ同月二日ノ御前會議ニ於テ定セラレタル國家機密事項ノ探知ニ努メ遂ニ其ノ決定事項ノ内ヲ諜知シテ被疑者ゾルゲニ報告シ同人ヲシテ之ヲ赤軍諜報機關通報漏泄シタル嫌疑アル爲檢事總長松坂廣政ヨリ右決定事項ノ容ヲ了知シ置タコトハ取調ノ衝ニ當ル檢事ニ於テ犯罪ノ成否其他事案ノ真相ヲ糾察スルニ付必要已ムヲ得ザルモノト思料セラニ付左記決定事項ノ内示方取計ラハレ度キ旨ノ具申有之右ハヨリ重大ナル國家機密ナルノミナラス事項ノ性質上勅許ヲ仰ギ然儼ト思料被候條之ガ執奏方御取計相成度及進達候也

記

一、昭和十六年七月二日御前會議ニ於テ決定セラレタル基本政

日本標準規格JIS

ノ内容

追而國家機密内示方ノ件ニ關シ檢事總長ヨリ當職宛具申書並東京刑事地方裁判所檢事正ヨリ檢事總長宛上申書ノ各寫書御考迄別紙添附致候

当時の「外謀」とは、

- ① 敵国 || 英米仏人
- ② 親善国 || 独伊蘇人
- ③ 準敵国 || 中国人

警保局外發甲第 號

昭和十六年十二月六日



内務省 警保局長

警視總監殿
關係廳府縣長官殿

外謀容疑者一齊檢舉ニ關スル件

外事關係非常措置ニ關シテハ昭和十六年十一月二十八日警保局外發甲第九七號通牒ニ基キ夫々計畫中ノコト、被存候モ近ク英米關係外謀容疑者一齊檢舉ノ指令發セラル、ヤモ知レザルニツキ別冊名簿登載ノ容疑者ニ關シ左記諸點ニ御留意ノ上檢舉準備相成度

記

一、檢舉ノ日時ハ改メテ指示ス

二、本名簿登載容疑者中ノ第三國人ニシテ其ノ後犯罪容疑ナキコト明瞭トナリタルモノハ所轄檢事局ト協議ノ上削除スルモ支障ナシ

三、本名簿登載ノ敵性國人（英米）容疑者ハ檢舉取調ノ結果犯罪關係ナキコト明瞭トナリタルトキハ退去處分ヲナサズ抑留スルモノトス

四、本名簿登載ノ容疑邦人ハ同時ニ檢舉スルコト

五、獨、伊、蘇聯（白系露人ヲ含マズ）ノ國籍所有者ハ檢舉チ一時保留スルコトニ決定シタルヲ以テ本名簿ハ蘇聯關係ノ容疑者及獨、伊、蘇聯國籍所有者ヲ削除シタリ

六、檢舉準備其ノ他ニ關シテハ所轄檢事局及憲兵當局ト緊密ナル連絡ヲ保持スルコト

七、本名簿ニ付異動アリタル場合ハ至急報告スルコト

1942年5月13日昭和天皇 へのゾルゲ事件上奏文 (「昭和天皇実録」)

「帝国の対ソ政策、特に対ソ戦
計画の有無・可能性」

● 4項目重点事項

- ① ソ連邦に重大なる影響を及ぼすべき帝国陸軍及空軍の増強並に編制替に関する事項
- ② 帝国の対支政策
- ③ 帝国の対米英外交政策
- ④ 帝国と独逸国との諸関係

昭和天皇
 1942.5.13 水曜日 午前、内大臣木戸幸一をお召しになり、一時間余にわたり謁を賜う。○侍従日誌、侍従武官日誌、百武三郎
 ゾルゲ事件
 午前十一時三十分、御学問所において司法大臣岩村通世に謁を賜い、尾崎秀実及びリヒャルト・ゾ
 ルゲ等の機密漏洩事件告発につき奏上を受けられる。なお十六日、司法省はゾルゲ事件を国際諜報
 団事件として発表する。○侍従日誌、侍従職日誌、内舎人日誌、侍従武官日誌、百武三郎
 日記、木戸幸一日記、読売新聞、現代史資料、日本政治裁判史録
 日録、供御録

● 漏洩事項7項目

- ① 昭和十六年七月二日開催せられたる御前会議の決定事項
- ② 政府大本営連絡懇談会の議に付する為内閣に於て準備したる日米国交調整に関する事項
- ③ 独ソ開戦に関するヒットラー大統領の意図及開戦予定日
- ④ 昭和十六年六月二十三日開催の軍事参議院会議及同年八月下旬開催の軍首脳部会議の内容
- ⑤ 満洲国に於ける帝国陸軍の編成、装備及配備状況
- ⑥ 日独防共協定及三国軍事同盟の経緯
- ⑦ 大日本帝国中華民国間基本関係に関する交調整に關する「内約」

5.11 「上奏文案」と5.16 「司法省発表」の落差

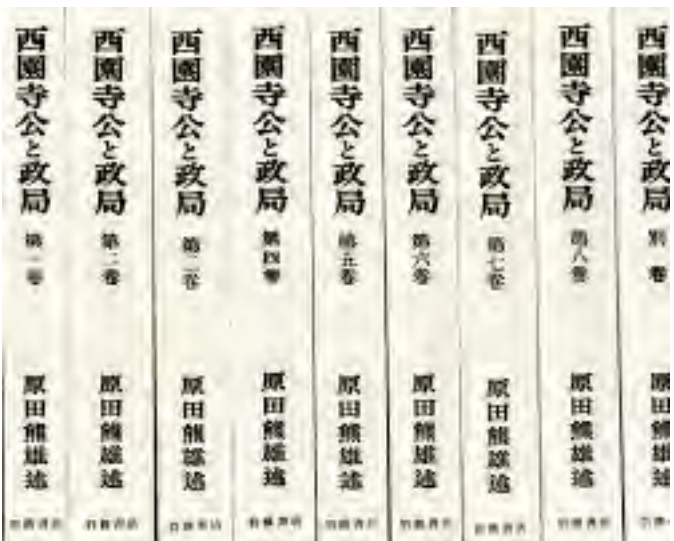
- ①42年3月司法省「ゾルゲ事件概要」の天皇に伝えるべき最重要点
- ②「ソ連赤軍」ゾルゲ、「内閣囑託」尾崎等5人＋「内閣兼外務省囑託」西園寺、「衆議院議員」犬養。北林トモ、スメドレー、オット駐日ドイツ大使等の名も入っている
- ③「赤軍4部」からソ連党中央へ
- ④「重点」4項目、「漏洩」7項目を明記し、7/2 御前会議が最重要
- ⑤西園寺・犬養は重大だが「情を知らずして」尾崎を「憂国有為の士なり」と誤信

- ①司法省発表は、上奏文を換骨奪胎・抽象化した防諜広報、有識者自粛自戒要請
- ②「コミンテルン情報局員」ゾルゲ、「満鉄囑託」尾崎等5人＋無肩書・西園寺「衆院議員」犬養のみ
- ③すべてコミンテルン・共産党で親善国「ソ連」「ドイツ」は無し
- ④「我国情に関する秘密事項」が「不逞団体」に漏洩、防諜注意
- ⑤西園寺・犬養は「尾崎の極めて巧妙な偽装に幻惑」され「不用意」に「利用せられ」たるもの



←天皇向け

VS.



「外人を
見たら思
え」⇒
パイ



「事件公表資料」にみる新聞検閲・報道統制

(208) 5月11日付「国際諜報団事件に関する発表要項(案)」(小尾俊人1962年『現代史資料 月報3』に全文掲載、ただし日付が5月17日とされている)から、

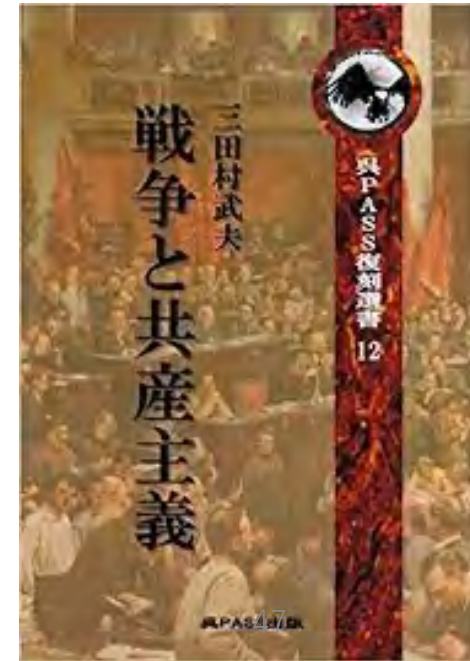
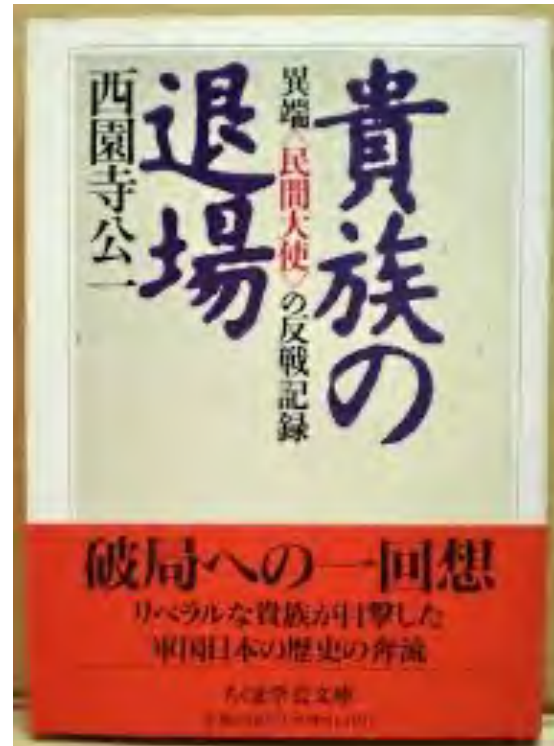
- (207-212)5月9日「刑事局長談」から11日「司法当局談」、12日「司法内務両当局談」文案10種異文
- 5月12日「司法省発表」5種異文、13日大審院検事局、14日外務省意見
- (213) 5月16日「新聞記事掲載要項」トツプ不可、4段組以下、写真不可(『毎日新聞』2018年8月18日付に全文掲載済み)

→成文 = 5月17日朝刊記事

(1962みすず1巻) 小尾俊人は発表文を「6月16日」と誤記、以後踏襲さる

• この過程で修正・抹消されたもの = 検閲・報道統制の事実そのもの、内容的には、

- ① ソ連・赤軍・独逸大使館等削除
- ② 北林トモ・スメドレー等削除
- ③ 重点4項目・漏洩7項目削除
- ④ 「ゾルゲ及尾崎等に於ては単に諜報活動に止らず我国の政策を左翼に有利に展開すべく企画策動」という諜報団の能動性・謀略性を示す案文はすべて削除
- ⑤ 「神助による慶賀」削除
- ⑥ 外務省意見による西園寺「内閣兼外務省囑託」削除から、尾崎も「内閣囑託」削除「満鉄囑託」のみへ



5 1枚の資料で変わるイメージと評価、IT/AI革命、ChatGPTと変わるインテリジェンス研究のなかで

ドイツ外務省
1933ゾルゲ出国記録
特約新聞に
『フランクフルター・アルゲマイネ』なし

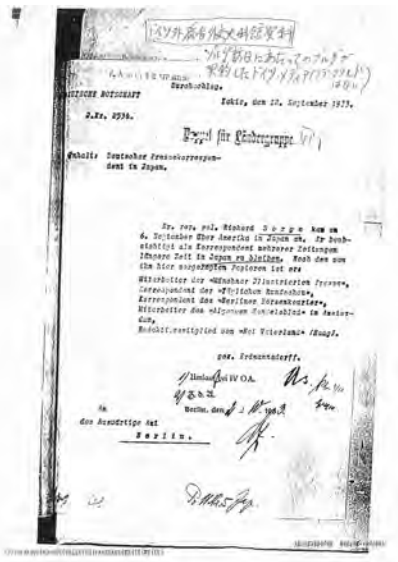


写真1 野々宮アパート全景 (出所)『建築雑誌』昭和11年11月号



左 リヒアルト・ゾルゲ
右 エリザベート・ハンソン女史=アイノ・クーシネンの『東京朝日新聞』インタビュー (1936年10月22日)



- ① 米国共産党から上海に派遣された鬼頭銀一
- ② 尾崎の上海後継者、昭和研究会事務局の堀江邑一
- ③ 米国から宮城を送り出した米国共産党矢野務=豊田令助=佐渡出身の将月令助
- ④ 尾崎秀実の検挙日は通説1941年10月15日か渡部説10月14日か
- ⑤ ゾルゲの未完成中国論と中国の尾崎=ゾルゲ研究の可能性
- ⑥ 「モスクワ中央部」=コミンテルンと各国共産党の真実、小林陽之助の全面供述

ゾルゲと同じ赤軍諜報員アイノ・クーシネンは、岡田嘉子と同じ野々宮アパートに住み、スウェーデン貴族として秩父宮に近づいた